

渕ヶ沢遺跡Ⅱ

新東名 No. 27-1 地点

新東名高速道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

沼津市-12

2017

中日本高速道路株式会社東京支社
静岡県埋蔵文化財センター

序

渕ヶ沢遺跡は、世界遺産である富士山の南に位置する、愛鷹山南麓の緩斜面に立地する遺跡です。

今回の調査は、旧農道にあたる未調査部分を対象としたもので、新東名高速道路に関する渕ヶ沢遺跡の最後の調査となりました。

検出された遺構・遺物は僅少ですが、発見された3基の旧石器時代の礫群や、テスティピット調査で検出された剥片（第IV黒色帶）など、過去の調査の成果を補強する成果も少なくありません。

本書が研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、中日本高速道路株式会社東京支社ほか、関係機関の御援助と御理解をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

2017年2月

静岡県埋蔵文化財センター所長
堤 敏 幸

例　　言

- 1 本書は、静岡県沼津市根古屋 958-12 他に所在する湧ヶ沢遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、新東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、中日本高速道路株式会社の委託を受け、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 湧ヶ沢遺跡の現地調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。
現地調査 平成 27 年 10 月～平成 28 年 3 月 実掘面積 1,487 m²
資料整理 平成 28 年 7 月～11 月
- 4 調査体制は以下のとおりである。
平成 27 年度
所長 赤石達彦 次長兼総務課長 田中雅代 調査課長 中鉢賢治
主幹兼事業係長 杉山智彦 主幹兼総務係長 大坪淳子
主幹兼調査係長 富樫孝志 主幹 中川律子 主査 岩本貴 主任 木崎道昭
平成 28 年度
所長 堀敏幸 次長兼総務課長 田中雅代 調査課長 中鉢賢治
主幹兼事業係長 杉山智彦 主幹兼総務係長 土戸美樹
主幹兼調査係長 富樫孝志 主幹 笹原千賀子 主査 岩本貴 主任 木崎道昭
- 5 本書の執筆は木崎道昭、竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）が行った。分担は以下のとおりである。
第 1 章～第 4 章 木崎道昭
付編 竹原弘展
- 6 本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。
- 7 現地作業、資料整理、報告書刊行にかかり、実施した委託事業の委託先は以下の通りである。
平成 27 年度 堀削業務委託 株式会社関道建設
測量業務委託 株式会社シン技術コンサル
平成 28 年度 整理作業業務委託 株式会社パソナ
黒耀石産地推定業務委託 株式会社パレオ・ラボ
- 8 発掘調査と整理作業では、以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚くお礼申し上げる。
上杉陽 前嶋秀張（五十音順・敬称略）。
- 9 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第VII系を用いた国土座標、世界測地系を基準とした。
- 2 調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
 $(X = A, Y = 1) = (-93750.0, 28040.0)$
- 3 出土遺物は通し番号（=遺物番号）を付して取り上げた。
- 4 遺構図、遺物実測図の縮尺は、図ごとに適当な縮尺を用い、それぞれにスケールを付した。
- 5 色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』（農林水産省技術会議事務局監修 1992）を使用した。
- 6 土層名は、第2章第2節の土層柱状図（第6図）に表示した名称を用いる。
- 7 下記の図については国土地理院発行地形図を複写し、加工・加筆した。
第1章第1節 潟ヶ沢遺跡位置図（第1図） 1 : 50,000 地形図「沼津」
第1章第3節 周辺遺跡分布図（第2図） 1 : 25,000 地形図「沼津」
- 8 遺構に関する表記（略記号）は以下のとおりである。
SK：土坑 RG：礫群 SY：集石
- 9 本文や引用・参考文献の記載にあたっては、以下のように統一した。
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所→静文研
静岡県教育委員会→県教委
静岡県埋蔵文化財センター→県埋文センター
(各) 市・町教育委員会→(各) 市・町教委
- 10 写真図版8の個々の遺物は、挿図記載遺物番号を付した。

目 次

序

例言

凡例

第1章 調査に至る経緯と遺跡の環境

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 自然的環境	2
第3節 歴史的環境	2

第2章 調査の概要

第1節 調査の方法と経過	7
第2節 土層	9

第3章 調査の成果

第1節 遺構	16
第2節 遺物	24

第4章 まとめ

付編 潟ヶ沢遺跡出土黒曜石製石器の産地推定	32
-----------------------	----

写真図版

抄録・奥付

挿図目次

第1図 潟ヶ沢遺跡位置図	1	第11図 第1面遺構個別図	17
第2図 周辺遺跡分布図	5	第12図 第2面遺構全体図	18
第3図 過去の調査区配置図	7	第13図 第2面遺構個別図	19
第4図 調査区配置図	8	第14図 第3面遺構全体図	20
第5図 テストピット配置図	10	第15図 1号縄群実測図	21
第6図 土層柱状図	11	第16図 2号縄群実測図	22
第7図 2区土層図	12	第17図 3号縄群実測図	23
第8図 テストピット土層図1	13	第18図 出土土器実測図	24
第9図 テストピット土層図2	14	第19図 出土石器実測図（縄文時代）	25
第10図 第1面遺構全体図	17	第20図 出土石器実測図（旧石器時代）	27

挿表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	4	第5表 縄群縦計測表	23
第2表 第2面遺構一覧表	19	第6表 出土土器観察表	24
第3表 1号集石縦計測表	19	第7表 出土石器計測表	28
第4表 第3面遺構一覧表	21		

挿写真目次

写真1 表土除去作業状況	15	写真3 テストピット下段の掘削作業状況	15
写真2 テフラ等現地指導状況	15	写真4 石器のデジタルトレース作業状況	15

写真図版目次

- | | | |
|------|---------------------------------|---------------------------------|
| 図版 1 | 1 第1面完掘状況（南から） | 2 1区北側富士黒土層中の遺物出土状況
(北から) |
| | 2 第2面完掘状況（南から） | 3 2区富士黒土層～漸移層中の遺物出土状況
(南東から) |
| 図版 2 | 1 第3面完掘状況（北西から） | 4 TP 1 北壁土層断面（南から） |
| | 2 2区北側土層断面1 | 5 TP 2 北壁土層断面（南から） |
| | 3 2区北側土層断面2 | 6 TP 3 東壁土層断面（西から） |
| 図版 3 | 1 1号土坑完掘状況（西から） | 7 TP 4 北壁土層断面（南西から） |
| | 2 2号土坑完掘状況（南から） | 8 TP 5 東壁（北側）土層断面（西から） |
| | 3 3号土坑半截状況（南から） | 図版 7 1 TP 5 東壁（南側）土層断面（西から） |
| | 4 3号土坑完掘状況（西から） | 2 TP 6 北壁土層断面（南西から） |
| | 5 4号土坑完掘状況（北東から） | 3 TP 7 東壁土層断面（北西から） |
| | 6 5号土坑完掘状況（南から） | 4 TP 8 北壁土層断面（南東から） |
| | 7 1号集石検出状況（南から） | 5 TP 8 東壁土層断面（南西から） |
| | 8 1号集石半截状況（南から） | 6 TP 1・2 完掘状況（南東から） |
| 図版 4 | 1 1号礫群（南東から） | 7 TP 3・4・7・8 完掘状況（南西から） |
| | 2 1号礫群に伴った尖頭器（南東から） | 8 TP 5・6 完掘状況（北東から） |
| | 3 2号礫群（北西から） | |
| 図版 5 | 1 3号礫群（南東から） | |
| | 2 1～3号礫群とその周辺の遺物出土状況
(南東から) | 図版 8 1 出土土器 |
| | 3 第IV黒色帶石器出土状況（TP 5）（北から） | 2 出土石器（縄文時代） |
| 図版 6 | 1 新期スコリア層～栗色土層中の遺物出土
状況（南から） | 3 出土石器（旧石器時代） 1 |
| | | 4 出土石器（旧石器時代） 2 |

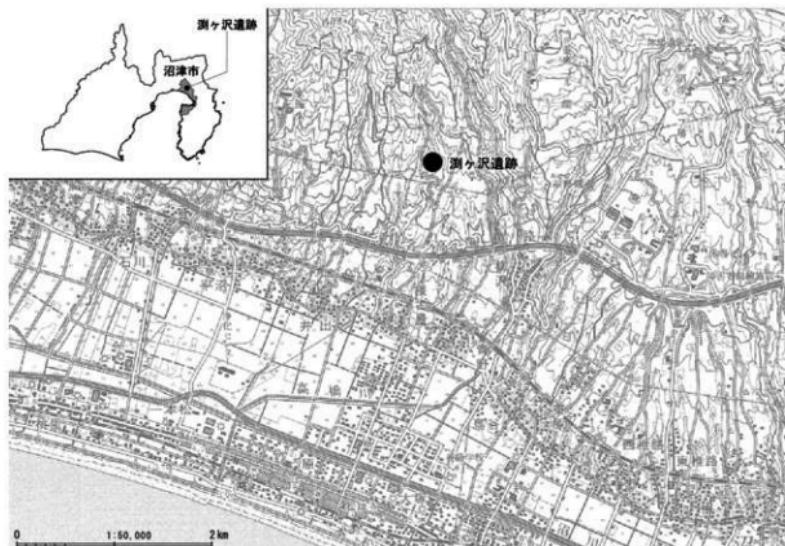
第1章 調査に至る経緯と遺跡の環境

第1節 調査に至る経緯

新東名高速道路は、神奈川県海老名市から静岡県を経由し、愛知県豊田市に至る高速道路である。1993年から長泉沼津インターチェンジ（以下ICと略）と豊田東ジャンクション（以下JCTと略）間で、1998年から御殿場JCTと長泉沼津IC間で工事がスタートし、2012年4月14日に御殿場JCTと浜松いなさJCT間が開通する運びとなった。

本遺跡の位置する、沼津市根古屋、西野一帯は新東名高速道路建設にあたり、サービスエリア（以下SAと略）の設置が予定された。高速道路本線部分を含め、広大なSA建設予定地内の埋蔵文化財としては、No.25 地点（秋葉林遺跡）、No.26 地点（的場遺跡・的場古墳群）、No.27 地点（測ヶ沢遺跡）が該当した。この3箇所の遺跡に関しては、静岡県埋蔵文化財センター（以下、県埋文センターと略）の前身組織である、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下、静文研と略）が調査を受託し、確認調査・本調査を行った。調査は平成11年1月の秋葉林遺跡の確認調査から開始され、平成10～15年度に大半の調査が行われた。この後、平成18～20年度に未調査部分の調査を行い、SA建設予定地内の調査は、今回の測ヶ沢遺跡の調査地点を除き全て終了した。当該地は新東名の開通と同時に、駿河湾沼津SA（NEOPASA駿河湾沼津）として開業した。

測ヶ沢遺跡については、平成11～15年度と20年度に確認調査と本調査を行っているが、調査工程等の関係から、遺跡の北側部分を静文研、南側部分を沼津市教育委員会（以下沼津市教委）が担当する



第1図 測ヶ沢遺跡位置図

こととなった。これにより、静文研調査部分をNo.27-1地点、沼津市教委調査部分をNo.27-2地点とした。

今回の調査は、ヘリポート建設のための調査であり、過去の本調査区1～3区に挟まれた南北農道と東西農道の跡地である。共同所有地であったため、過去の調査時点では未買収であった（第3図）。

第2節 自然的環境

渕ヶ沢遺跡は、愛鷹山南麓の裾野に位置する（第1図）。標高は、No.27-2地点まで含めれば、約165～110m程あり、遺跡内の比高差が大きい。今回の調査地点の標高は約164～144m程度であり、遺跡の最上部に位置する。遺跡の立地する愛鷹山南麓は、高橋川が刻む谷を境界にして、地形の様相がかなり異なっている。本遺跡の立地する西側は、火山麓扇状地としてかなり深い谷に刻まれた地形である。また南に向かって急傾斜であり、山麓の末端部は浮島ヶ原の堆積物の下に埋もれている。高橋川の谷より東側は火碎流堆積面の張り出し原面が良く残っており、全体として、放射谷は西側に比べて浅い（町田他 2006）。このような地形上の相違は旧石器時代の遺跡のあり方に影響を与えると考えられ、特に陥穴状の土坑の分布範囲との関連は今後の課題であると思われる。

愛鷹火山は富士火山の南南東に接する。麓の直径は約15km以上の成層火山である。活動期間は約40万年～10万年前に及び、箱根火山の活動期と重なる。愛鷹山南麓にはテフラが厚く分布するが、その中、上部のほとんどは富士山を主とする他の火山から飛来したものである。テフラ群の上部には埋没土壤がよく発達しており、旧石器時代以降の遺跡が含まれている。

第3節 歴史的環境

渕ヶ沢遺跡周辺には旧石器時代から近世・近代に至る遺跡が多数存在し、愛鷹山麓の丘陵部分の先端部に限定すれば、県内でも最も遺跡密度が高い地域の一つである。また、前節でも述べたように、丘陵部分は分厚いローム層に覆われ、旧石器～縄文時代の遺跡が未発見のまま数多く眠っていると推定される（第2図、第1表）（註1）。本節では、今回の調査で遺構・遺物が検出された、旧石器時代・縄文時代早期・縄文時代晚期後半～弥生時代中期前半、円形土坑が作られたと考えられる中世以降に限定して述べていきたい。

旧石器時代の遺跡は愛鷹山麓の丘陵部分は高い密度を誇る。静岡県内でも箱根山麓や磐田原台地となる代表的な遺跡集中地域である。また、近年の大規模調査においては、丘陵部分のはほとんどどの遺跡で旧石器時代の遺物が検出されている状況である。

本遺跡周辺の旧石器時代の遺跡としては、本遺跡の近接地域では、ヌタバ遺跡（19）、藤ボサ遺跡a区・b区（17・18）、茗荷沢遺跡（20）（静文研 2010 b）、銭神遺跡（21）、鎌ヶ沢（鎌沢）遺跡（55）（県埋文センター 2012 b）、的場遺跡（53）（静文研 2010 c）、秋葉林遺跡（54）（静文研 2009 a）、井出丸山遺跡（110）（沼津市教委 2011）、根古屋清水遺跡（116）がある。平沼の遺跡空白地域の西の図示した範囲では、陣ヶ沢B遺跡（2）、猫山遺跡（6）、吹上遺跡（7）（沼津市教委 1985）があり、大半が第一東名高速道路より北側に分布する。吹上遺跡と根古屋清水遺跡は、丘陵上であるがかなり標高が低く、やや特殊である。本遺跡群の東側、高橋川の谷以東では、井戸川西遺跡（63）、元野遺跡（68）（静文研 2008）、土橋第II遺跡（92）、イタドリC遺跡（93）、イタドリB遺跡（94）、イタドリA遺跡（95）

(静文研 2009 b)、伊良宇跡遺跡 (69・70) (沼津市歴史民俗資料館 1983)、大席遺跡 (75)、元野第三遺跡 (90)、元野橋南遺跡 (82)、西大曲遺跡 (106) (沼津市教委 1980)、洞林遺跡 (101) があり、標高の高い地域には、三角遺跡 (102)、休場下遺跡 (103)、休場南遺跡 (104)、休場遺跡 (105) (杉原・小野 1965) があるものの、大半が東名高速道路より北側である。

これらの旧石器時代の遺跡では、休場層段階では、基本的に全ての遺跡で遺物の出土が確認できる。ATが含まれるニセローム層以下で遺物の出土が確認されているのは、本遺跡を含めて、管見の限りでは以下のとおりである。渕ヶ沢遺跡 (BB IV、BB III)、藤ボサ遺跡 a 区 (NL)、鎌ヶ沢 (鎌沢) 遺跡 (BB III、BB II、NL)、的場遺跡 (BB VII、BB V、BB III、BB II)、秋葉林遺跡 (BB VII、SC III、BB III、BB II、NL)、井出丸山遺跡 (SC IV～BB VII、SC II～BB II)、元野遺跡 (SC IV、BB VII、BB III、BB II、NL)、イタドリ A 遺跡 (NL)、西大曲遺跡 (BB III、BB II)。これらはいずれも近年の大規模調査で検出されている。また、愛鷹・箱根山麓で検出される注目すべき遺構として、陥穴状の大型土坑があるが、これが、渕ヶ沢遺跡と鎌ヶ沢 (鎌沢) 遺跡で発見されている。いずれも第III黒色帶から掘り込まれ、第IIIスコリア層中に掘り込みを持つという特性がある。また、その発見遺跡の位置関係から、該期の集落と狩猟場の位置的分離を説く説がある (池谷 2009)。なお、本遺跡では出土していないが、SC IV～BB VII層から出土した石器群は、年代が明確で、人類の遺物として確定できるものとしては、日本列島で最古級の石器である。本遺跡周辺で複数の遺跡から発見されているのは注目すべきであろう。なお、本遺跡で遺物が検出されている BB IV層での検出例は、本遺跡周辺ではなく、貴重な例といえるであろう。

縄文時代の遺跡であるが、遺物が検出されている早期の遺跡としては、以下のとおりである。猫山遺跡 (6)、吹上遺跡 (7)、藤ボサ遺跡 a 区・b 区 (17・18)、茗荷沢遺跡 (20)、銭神遺跡 (21)、閑峰遺跡 (25) (沼津市 2002)、焼畑遺跡 (30)、光嚴寺沢遺跡 (45)、的場遺跡 (53)、秋葉林遺跡 (54) (静文研 2010 a)、鎌ヶ沢 (鎌沢) 遺跡 (55)、元野遺跡 (68)、角右衛門アラク遺跡 (71)、鳥谷アラク遺跡 (80) (沼津市教委 2000)、東原古墳群 (81)、元野第三・II 遺跡 (90・91)、イタドリ C・B・A 遺跡 (93～95)、西大曲第II遺跡 (97)、西大曲遺跡 (106)、井出丸山遺跡 (110)、根古屋清水遺跡 (116)。このうち太字で記したのは、草創期の遺物も出土した遺跡であるが、土器は発見されておらず、有舌尖頭器等の草創期特有の石器から判断した。

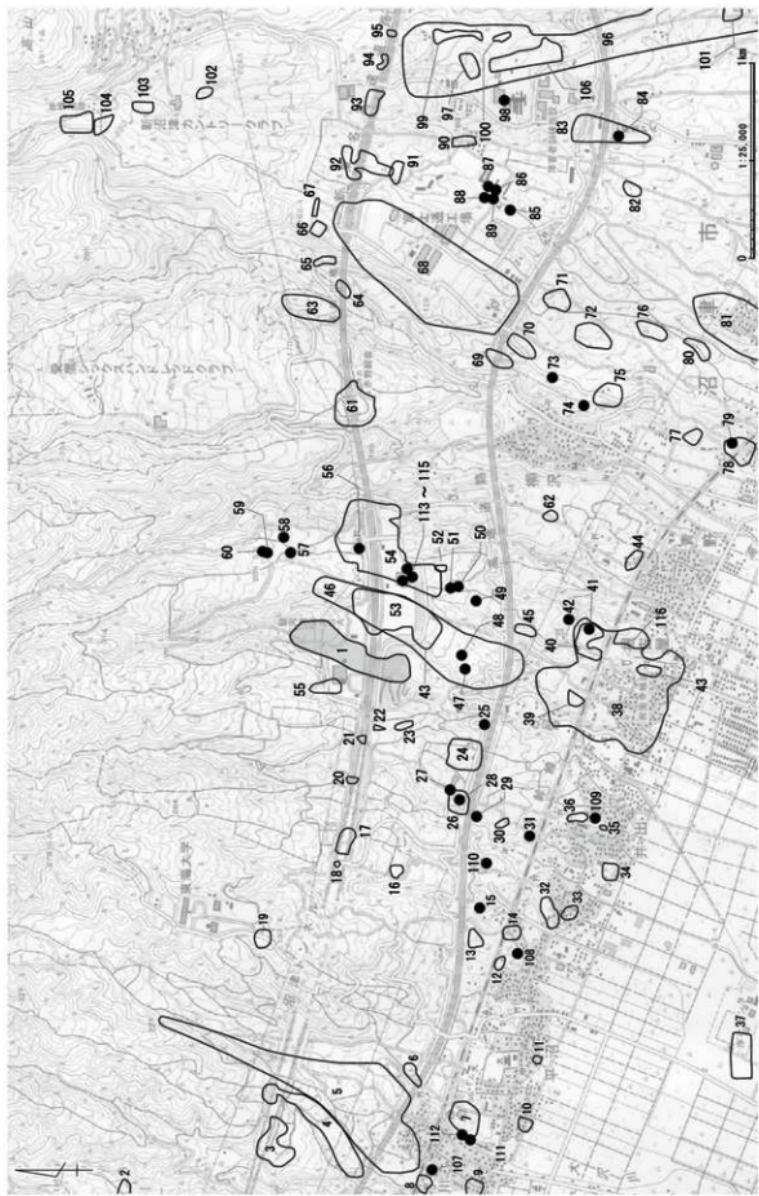
早期の遺跡は、旧石器時代と重なる例が多い。また、縄文時代から開始される遺跡は、旧石器時代の遺跡に比べて、丘陵上ではあるが、標高がやや低くなる傾向が看取される。愛鷹山麓の丘陵上を大規模に調査すれば、縄文早期の土器はほとんど普遍的に出土するので、将来的には遺跡数が増大することが予想される。ただし、大規模調査された遺跡であっても、早期段階においては、堅穴住居の発見例は極めて少なく、移動性の高い生活を営んだ痕跡が、本遺跡周辺に残されているといった趣である。

縄文時代後期後半～弥生時代中期前半の遺跡は、県内でも最も遺跡の少ない時期であり、本遺跡周辺でも同様である。縄文時代後期段階で僅かに見られた丘陵上の遺跡は、現状では全く見られなくなる。管見の限りでは、葱川遺跡 (11) (小野・笛津 1971)、雌鹿塚遺跡 (37) (沼津市教委 1990) くらいである。葱川遺跡は早くから知られた遺跡で、丘陵の末端部から低地に移行する箇所に立地する。氷 I 式土器、氷 II 式や櫛王式併行の土器、丸子式土器等が出土している。雌鹿塚遺跡は、浮島ヶ原の低湿地に位置する遺跡で、西日本系の黒色磨研土器や、突帯文土器が出土している。

最後に円形土坑が構築された時期と思われる中世・近世である。吹上遺跡 (7)、藤ボサ遺跡 a 区 (17)、銭神遺跡 (21)、阿野氏館 (34) (静岡県教育委員会 1981)、興国寺城跡 (38) (沼津市 2002)、秋葉林遺跡 (54) (県埋文センター 2012 a)、元野馬牧土手 (65～67)、石川の栗田氏屋敷跡 (107)、平沼の土槽 (108) (中野 1983)、井出氏屋敷跡 (109)、根古屋清水遺跡 (116) などがある。なお、太字は本遺跡と同様な、あるいは類似する円形土坑が検出された遺跡である。中世・近世の遺跡は大別し

第1表 周辺道跡一覧表

№	道跡名	時代	№	道跡名	時代
1	西ノ武道跡	古石器、調文革新～後期、共生後期？、 佐生以降（円筒上坑物）	56	船形古墳	古墳
2	東ノ武道跡	古石器、調文、古墳	57	元野古墳群（タケノ原古墳群）	古墳
3	長坂道跡	調文前期	58	元野古墳（タケノ原古墳群）	古墳
4	中里上・下道跡	調文中期、共生後期、古墳	59	元野古墳群（タケノ原古墳群）	古墳
5	石川古墳群	古墳後期	60	元野古墳群（タケノ原古墳群）	古墳
6	鶴山遺跡	臼石器、調文早期	61	金野古墳	共生後期
7	枕上遺跡	臼石器、調文中期～後期、共生後期、 古墳、古墳	62	曾野原丘陵道跡	古墳
8	小坂上道跡	調文中期、共生後期、古墳	63	曾野原丘陵道跡	臼石器、調文
9	南山道跡	先石器期、古墳	64	曾野原丘陵道跡	調文、共生
10	道ノ下道跡	調文中期、共生後期、古墳	65	元野古墳上・下道跡	近世
11	道跡	調文中期～後期、共生後期～後期、 古墳～後期	66	元野古墳上・下道跡	近世
12	上・堆道跡	調文後期、共生後期	67	元野古墳上・下道跡	近世
13	川ノ道跡	共生後期	68	野野原道跡	臼石器、調文革新～中・後期
14	土上古墳群	古墳後期	69	伊佐字古墳	臼石器
15	高田丸山古墳	古墳後期	70	伊佐字古墳	対向段
16	大山植上道跡	調文	71	高石神代アラカニ跡	調文革新～前期
17	藤子ノ下道跡A区	臼石器、調文革新、前期、古墳以降（円筒上坑物）	72	大久忍道跡	調文革新～後期、共生、古墳
18	藤子ノ下道跡B区	臼石器、調文革新～中・後期、古墳、卓良	73	セワツ古墳	古墳後期
19	メノノ道跡	臼石器、調文中期	74	古賀古墳	古墳後期
20	大吉ノ道跡	臼石器、調文革新～中期	75	火ノ原道跡	臼石器、調文革新～中・後期
21	桃神道跡	臼石器、調文革新～中期、佐野ア、 佐野以降（円筒上坑物）	76	トトノ道跡	調文中期
22	桃神面道跡	桃神面	77	トトノ道跡	調文革新～中期、中・後期
23	桃神南道跡	桃神面	78	ウカメ道跡	共生後期、古墳～中・後期
24	日向道跡	調文、古墳	79	鳥居山ノ神（山神）古墳	古墳後期
25	御壁道跡	調文中期、共生後期	80	鳥谷アツク道跡	調文革新～早、中・後期
26	御人道跡	古墳	81	葉ノ原古墳群	調文革新、古墳後期
27	御船古墳群	古墳後期	82	元野橋上道跡	臼石器
28	御船古墳群	古墳後期	83	芝荒ノ古墳（芝荒古墳）	古墳
29	二ノ原ノ古墳	古墳後期	85	芝荒ノ古墳	古墳
30	御船道跡	調文革新	86	西ノ原ノ古墳	古墳
31	井山3号墳（後伊古野）	古墳後期	87	西ノ原ノ古墳	古墳
32	松ノ人道跡	共生後期	88	四ツ塚ノ古墳群	古墳
33	神ノ人道跡	調文中期、後生中～後期、 古墳～後期	89	四ツ塚ノ古墳群	古墳
34	御人古道跡	中・後期、御人中～後期、 古墳～後期	90	元野頭古墳	臼石器、調文革新
35	高瀬地式横穴六個	古墳？	91	元野頭古墳	調文革新
36	毛利塚道跡	御人後期	92	上原田ノ道跡	臼石器、調文
37	御前道跡	調文中期～後期、御人中～後期、 古墳～後期	93	イタリリコ古墳	臼石器、調文革新
38	奥田今朝路	調文中期、共生中～後期、古墳而後、後期、 卓良、中世～近世	94	イタリリコ古墳	臼石器、調文革新～前期、卓良
39	シマラミ道跡	古墳	95	イタリリコ古墳	臼石器、調文革新～前期、卓良
40	御古丸山古墳群	調文中期、共生後期	96	周防保母御壁	古墳
41	魔芋八六古墳	古墳？	97	西大崩第百道跡	調文革新
42	魔芋八六古墳	古墳	98	西大崩道跡	古墳
43	古屋道跡	調文、共生中～後期、古墳	99	西大崩道跡	古墳
44	下ノ川道跡	古墳	100	西大崩東面古墳跡	臼石器、調文革新～後期
45	元前今之道跡	調文革新	101	源林道跡	臼石器
46	の壠古墳群	古墳後期	102	三尚道跡	臼石器
47	の壠古墳	古墳後期	103	伏塚ノ古墳	臼石器
48	の壠古墳	古墳後期	104	伏塚南道跡	臼石器
49	丸山古墳群	古墳	105	伏塚南道跡	臼石器、調文革新、後期、古墳？
50	丸山古墳群	古墳	106	西大森古墳	臼石器、調文革新、後期、共生後期、 古墳後期
51	新野古墳群	古墳	107	有川の御田丸古墳群	帆船
52	御田道跡	臼石器、調文革新～中期、古墳後期、宇治	108	平田の上轟	帆船～古墳
53	伏塚秋道跡	臼石器、調文革新～後期、共生後期、 古墳～後期、卓良、伏塚以降（円筒上坑物）	109	舟山丸古墳群	帆船
54	御古清水道跡	古墳～後期、卓良、伏塚以降（円筒上坑物）	110	舟山丸古墳	臼石器、調文革新
55	御古清水道跡（藤子道跡）	臼石器、調文革新～後期	111	枕ノ上古墳	古墳後期
56	古野古道跡	古墳	112	枕ノ上古墳	古墳後期
57	御田道跡	臼石器、調文革新～中期、古墳後期、宇治	113	御田丸古墳群	古墳後期
58	伏塚古墳群	古墳後期	114	伏田丸古墳群	古墳後期
59	伏塚古墳群	古墳後期	115	伏田丸古墳群	古墳後期
60	御古清水道跡	古墳	116	御古清水道跡	臼石器、調文革新、共生後期、 古墳後期、後期、帆船



第2図 周辺道路分布図

て、本遺跡と同様に丘陵上に立地し、円形土坑や構等が検出される遺跡と、中世～近世初期における城館関係の遺跡に分れる。前者の遺構は遺物が出土することがほとんど無いことから、構築時期に関しては検出面の時期以降とされ、報告書では必ずしも中世以降としているわけではない。

本遺跡周辺の城館の代表例は、言うまでもなく興国寺城跡である。国指定史跡であり、沼津市教育委員会による史跡整備関係等の調査が数次にわたって行われ、次第にその全容が明らかになりつつある。これらの館跡、屋敷跡は、根方街道（中世の東海道）に概ね沿って分布しており、中世～近世の在地土豪層のあり方を考える上で、重要な材料となると思われる。土壙等が残存しているものもあり、十分な保存策が講じられる必要があるだろう。

註

1. 本節での周辺遺跡分布図（第2図）、周辺遺跡一覧表（第1表）は、「静岡県GIS」内のレイヤー「静岡県埋蔵文化財包蔵地カード」をベースにして、『沼津市史 資料編 考古』（沼津市 2002）、『沼津市埋蔵文化財分布地図』（沼津市教育委員会 1987）、『静岡県文化財地名表I』（静岡県教育委員会（以下県教委と略）1988）、『静岡県文化財地図I』（県教委 1988）を利用して補った。また、各遺跡の発掘調査報告等を適宜参照した。

第2章 調査の概要

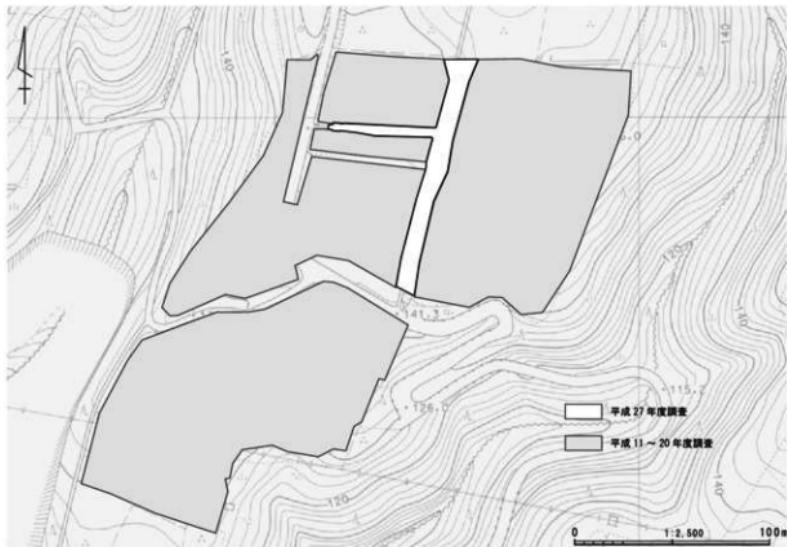
第1節 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

前章で述べたとおり、今回の調査は、未買収であった2本の旧農道が対象である。南北農道を1区、東西農道を2区とした（第3・4図）。過去の調査成果から類推して、1区南半を除き比較的良好な残存状況であると想定された（註1）。

過去の調査により、今回の調査区の隣接部分の状況が判明しているため、以下のような手順で調査を進めることにした（1区・2区共通）。

- ① 表土等除去。重機で行う。擾乱等の除去も可能な限りこれに含める。
- ② 新期スコリア層（NSC）上面で、古墳時代以降の遺構を検出し調査する。過去の事例から、残存状況の良い箇所であっても、表土直下が新期スコリア層となっていると想定された。
- ③ 新期スコリア層から富士黒土層（FB）上面まで人力掘削する。FB上面で遺構検出と遺構調査を行う。ここで空中写真撮影にて、地形測量を行う。ここまでを第1面とする。
- ④ 富士黒土層から漸移層（ZN）までを人力掘削する。休場層上面を遺構検出面とし、遺構調査を行う。空中写真撮影を行い、地形測量を行う。ここまでを第2面とする。
- ⑤ 休場層を人力掘削する。休場層直下黒色帶（BB O）の上面まで掘削し、遺構確認面とする。空中写真撮影を行い、地形測量を行う。ここまでを第3面とする。調査区全面の掘削はこの面で終了



第3図 過去の調査区配置図

する。

- ⑥ 調査区全体に 4×4 m のテストピット (TP) を 12 箇所設定し、人力掘削を行う（第5図）。途中、遺物・遺構が検出された場合は、TP を拡張して、その広がりを確認する。陥穴状の土坑の有無を確認するため、第IIIスコリア層上面で遺構確認を行う。TP 底面は水平を保ち、TP の掘り始めからの最大掘削深度 2 m まで掘削する。
- ⑦ TP 内中央に 2×2 m の下段調査区を設定し、人力掘削する。最大掘削深度 2 m まで掘削するが、中部ローム層中のペアスコリアが確認できたところで TP の調査を終了する。

遺物については、自然疊にいたるまで、出土位置を点取りしながら取り上げた。擾乱土中の遺物についても出土グリッド位置を記載して取り上げた。また、集石及び疊群の構成疊も他の遺物と一緒に通し番号を付けた。遺構図面の作成は、株式会社シン技術コンサルに委託して、空中写真による写真測量を主にして実施した。遺構等の写真撮影は、 6×7 判中判カメラを使用し、カラーリバーサルとモノクロネガのフィルム写真を撮影した。また、35 mm カメラとデジタルカメラを補助的に使用した。

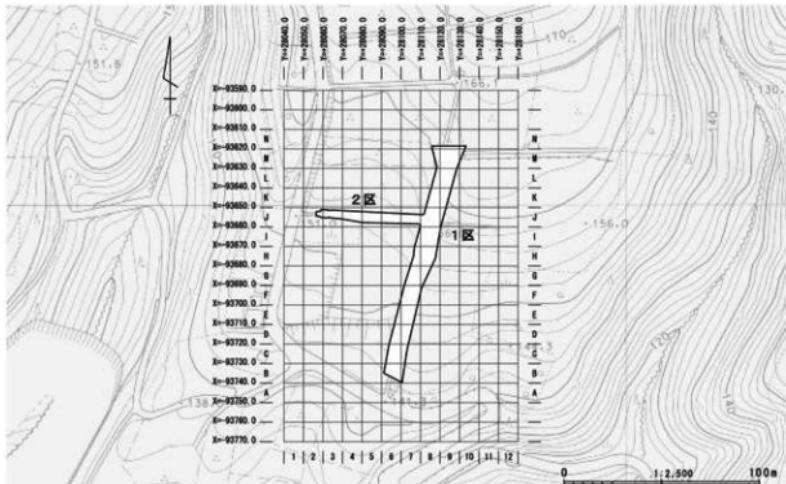
(2) 現地調査の経過

調査に先だって、調査区とその周辺地域の草刈、小木の伐採を行った。草刈り等終了後の平成 27 年 10 月 19 日より、重機による表土除去作業を開始した。1 区の南端部から開始したが、1 区は特に南側を中心として残りが悪く、多くの箇所で第 I スコリア層以下まで削平されていた。

1 区と併行して 2 区の表土除去を行ったが、こちらの残存状況は良好で、大半の箇所でコンクリート直下に新期スコリア層が残存していた。

なお、農道下で地盤改良のため埋土は全て除去した。このため、表土等の掘削土量及び作業日数は、当初設計よりもかなり増加している。

11 月 10 日より作業員を投入して、人力掘削作業を開始した。2 区の第 1 面（新期スコリア層残存部分上面）の遺構確認を行い、円形土坑 3 基を検出、調査した。終了後、新期スコリア層以下の包含層掘削を行った。1 区については、全体を通して FB 層の残りが極めて悪く、第 1 面の調査から除外した。



第4図 調査区配置図

そこで2区の調査と平行してFB層の掘削を行った。2区はFB層上面までの掘削を行い、12月21日に空中写真撮影及び航空測量を行い、第1面の調査を終了した。

引き続きFB層以下の第2面の包含層を掘削した。YL層上面までに、2区で集石遺構と土坑を検出し、それぞれ遺構調査を行った。1区は僅かに残存したFB層中から極めて少ない遺物が出土したのみで、遺構はなかった。YL層上面までの第2面は平成28年1月12日に空中写真撮影ならびに航空測量を行ない終了した。

続く第3面(YL層)の調査においては、2区で3基の礫群を検出し調査した。2区からは礫群以外にも、遺物と礫が散在して出土したが、ブロック状の集中部を見出すことはできなかった。2月10日に空中写真撮影ならびに航空測量を行い、BB0層上面までの第3面の調査を終了した。なお、1区は残存していたYL層を全て人力掘削したが、遺物の出土は無かった。2区谷部においては、土層の判別を誤ったため、本来、BB0層上面での地形測量を、谷部のみは休場層下層(YLL)上面で計測してしまった。そこで、今回の報告書では谷部のみ等高線を入れず、遺構全体図を作成している(第3章)。航空測量終了後にYLLの掘削を完了させ、第3面の調査を終了した。

BB0層上面まで、調査区全体にわたる包含層掘削は終了し、2月10日より調査区全面に設定した12箇所のテストピット(上段4m四方、下段2m四方)の掘削を行った。途中TP5より黒耀石製の剥片が第IV黒色帯の最上部より検出されたため、TP5を拡張し、遺物の広がりを追求したが、他の遺物は検出されなかつた。また、前述のとおり、第IIIスコア層の上面で陥穴状の土坑の検出に努めたが、全てのTPで検出されなかつた。TP全体で、遺物(礫含む)は上述のTP5出土の剥片のみであり、他のTPからは全く検出されなかつた。3月11日にTPの全景写真を撮影し、平成27年度の渕ヶ沢遺跡の現地調査を全て終了した。途中2月12日に、都留文科大学名誉教授上杉陽先生に現地に来訪して頂き、主にニセローム層(NL)以上の上部層の火山灰についての現地指導を受けた。

掘削土量の計測、コンテナハウス等の撤去作業を行い、3月17日、現地から撤収した。

(3) 資料調査(整理作業・報告書作成)

平成28年7月から11月にかけて、資料整理作業を実施した。遺構・遺物の図化作業等を株式会社パソナに委託し、整理・報告書作成作業を行った。遺構図面は、現地測量業務委託の納品物である、株式会社シン技術コンサルの写真測量のデータを原図として用いた。遺構図・遺物図の編集、版組、トレイスはAdobe Illustrator CS3により行った。

8月2日に遺物写真撮影を実施した。中判カメラを使用し、カラーリバーサルとモノクロネガのフィルム写真を撮影した。

黒耀石の産地分析を行うため、6点の試料を抽出し、株式会社パレオ・ラボに分析を委託した(付録参照)。

11月30日をもって、報告書作成にかかる作業を終了した。

第2節 土層

今回の渕ヶ沢遺跡の調査では、愛鷹山南麓の標準土層の堆積が確認できたが、2区の谷底部は各層が厚いため、現地での土層記述を基に記述する。なお、分層及び比定等について、都留文科大学名誉教授上杉陽氏、沼津市教育委員会前嶋秀張氏に教示を賜った部分があることを付記しておきたい。

以下のとおり、基準土層を設定した(第6~9図)(図版2・6・7)。なお、第6図の柱状図は、2区土層図(第7図)、テストピット2(TP2)の土層図(第8図)を合成して作成した。TP2において

は深度の関係から、下記の第30層（中部ローム4）までしか掘削できなかったため、図には第31層以下が記載されてはいない。第31層以下については、TP 2以外のテストピットを参照のこと。

第1層：新期スコリアを含む層である（NSC）。2区においては大半の部分で認められた。2区では、この層の上に砂石を敷き、コンクリート路盤が設置されていた。この層中から、第18図5の条痕土器が出土した。

第2層：カワゴ平バミスを含む層である（KGP）。

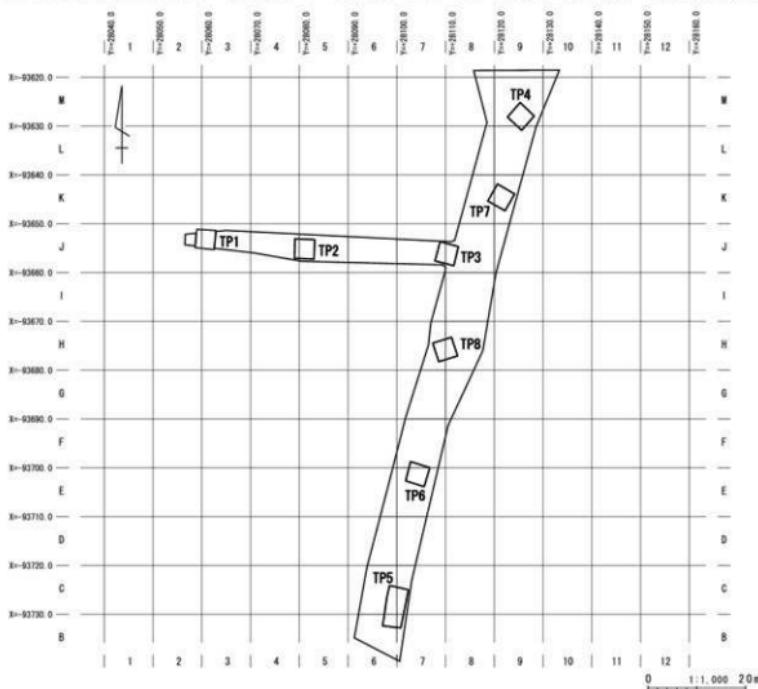
第3層：愛鷹基本層序の暗褐色土層に相当する（AN）。本遺跡の過去の報告（県埋文センター2013）で記載のある、KGP～AN間の黒色土（KUO）と黄褐色土（OKS）は、今回の調査では、2区の谷底部においても認識できなかった。相当部分は、上下のKGP及びAN層に含まれていると考えられる。

第4層：にぶい黄褐色土層である。栗色土層（KU）に相当する。層厚の厚い箇所ほど黄褐色の発色は良好である傾向が見られる。

第5層：富士黒土層（FB）に相当する。第4層との境界は比較的明瞭であるが、次の第6層との境界は漸移的であり、かならずしも明瞭ではない。

第6層：漸移層（ZN）である。にぶい黄褐色（10YR 5/3）を呈する部分がある。赤色スコリアを含む。

第7層：休場層上層（YLU）である。にぶい黄褐色（10YR 4/3）を呈す。第6層との境界は比較的明



第5図 テストピット配置図

瞭である。赤色及び黒色スコリアを含む。縮まり、粘性ともややあり。この層と次の第8層との間のスコリア層 (Yls 1) は確認できなかった。

第8層：休場層中層 (YLM) である。灰黄褐色 (10YR 4/2) を呈す。赤色スコリアを含む。黒色スコリアを少量含む。縮まり、粘性ともにあり。この層と次の第9層との間に、谷底部を中心に、暗赤褐色スコリアの薄層 (Yls 2) が広範に認められた。

第9層：休場層下層 (YLL) である。褐灰色 (10YR 4/1) を呈す。赤色、黒色スコリアを多く含む。縮まり、粘性ともにあり。

第10層：休場層直下黒色帶 (BB O) である。黒褐色 (10YR 3/2) を呈す。縮まり、粘性ともにややあり。谷部においては比較的明瞭に識別できるが、尾根部では次のSC I層と混在し、識別できない箇所が多い。

第11層：第Iスコリア層 (SC I) である。にぶい黄褐色 (10YR 4/3) を呈す。赤色、黒色スコリアを多量に含む。スコリアが凝集している部分が散在する。

第12層：第I黒色帶 (BB I) である。黒褐色 (10YR 3/1) を呈す。赤色、黒色スコリアを多量に含む。スコリアが強く凝集している部分が散在する。

第13層：ニセローム層 (NL) である。にぶい黄褐色 (10YR 5/4) を呈す。ATテフラのバッチを含む。縮まり強い。粘性ややあり。

第14層：第II黒色帶 (BB II) である。褐灰色 (10YR 4/1) を呈す。細かい赤色スコリアを含む。縮まり、粘性ともにあり。

第15層：第IIスコリア層 (SC II) である。

褐色 (7.5YR 4/3) を呈す。赤色スコリアを多量に含む。縮まり、粘性ともにあり。

第16層：第III黒色帶 (BB III) である。

黒褐色 (10YR 3/1) を呈す。赤色スコリアを含む。縮まり、粘性強い。

第17層：第IIIスコリア帶スコリア1 (SC

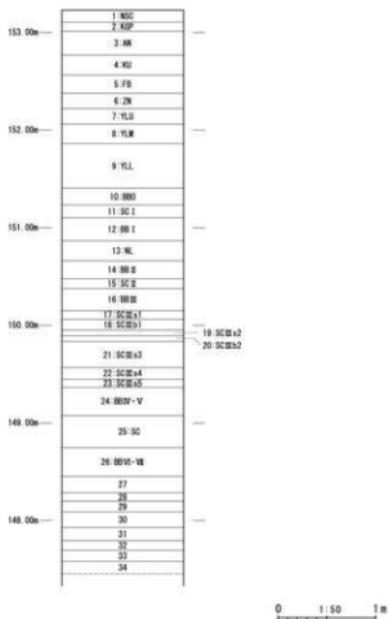
III_a 1) である。灰褐色 (7.5YR 5/2) を呈す。赤色スコリア、黒色スコリアを含む。縮まり強い。粘性あり。

第18層：第IIIスコリア帶黑色帶1 (SC

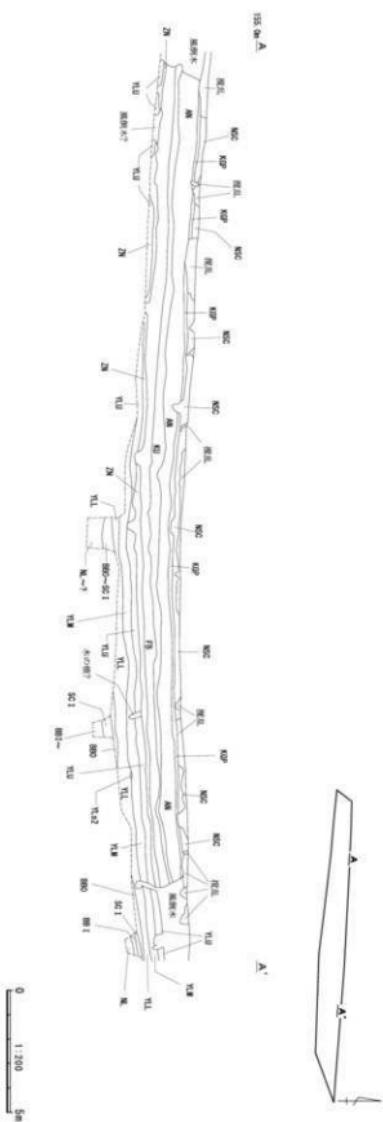
III_b 1) である。褐灰色 (7.5YR 4/1) を呈す。赤色スコリア、黒色スコリアを含む。縮まり強い。粘性あり。

第19層：第IIIスコリア帶スコリア2 (SC

III_a 2) である。灰黄褐色 (7.5YR 5/2) を呈す。赤色スコリア、黒色スコリアを多く含む。縮まり強い。粘性あり。



第6図 土層柱状図

第7図
2区土層図

第20層：第IIIスコリア帶黒色帶2（SC III b 2）である。灰黄褐色（10YR 4/2）を呈す。赤色スコリア、黒色スコリアを多く含む。締まり強い。粘性あり。

第21層：第IIIスコリア帶スコリア3（SC III s 3）である。灰褐色（5YR 5/2）を呈す。赤色スコリア、黒色スコリアを多く含む。粒径5mm大の黒色スコリアが目立つ。硬く締まり、粘性弱い。

第22層：第IIIスコリア帶スコリア4（SC III s 4）である。にぶい黄褐色（10YR 4/1）を呈す。赤色スコリア、黒色スコリアを多く含む。硬く締まり、粘性弱い。

第23層：第IIIスコリア帶スコリア5（SC III s 5）である。褐灰色（10YR 4/1）を呈す。赤色スコリア、黒色スコリアを多く含む。硬く締まり、粘性弱い。

第24層：第IV、第V黒色帶に相当する層である。スコリア層により本来は分離されるが、スコリア層を確認できなかつたため、同一層とした。黒色（7.5YR 2/1）を呈す。粒径5mm～1cm大の黒色スコリアが目立つ。硬く締まり、粘性弱い。なお、今回の旧石器時代層下部調査のテストピット5（TP 5）で出土した黒耀石の剥片（図版8-3-16）は、この層の最上部より出土したため、第IV黒色帶のものと判断した。

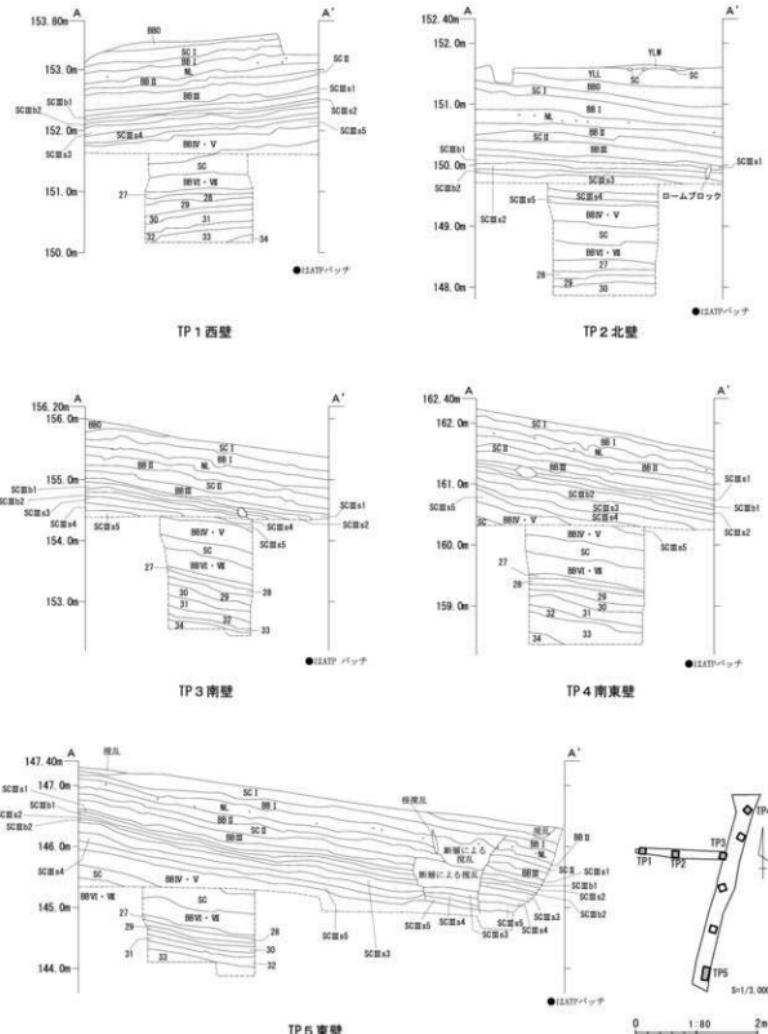
第25層：スコリア層（SC）である。上部にはスコリアが凝集している部分がある。中間は赤色スコリアが多量にあり、下部は漸移的に下層に続く。締まり、粘性ともにあり。

第26層：第VI、第VII黒色帶に相当する層である。本来はスコリア層により分離されるが、スコリア層を確認できなかつたため、同一層とした。黒色（10YR 2/1）を呈す。赤色スコリア、黒色スコリアを多く含む。締まり、粘性ともにあり。

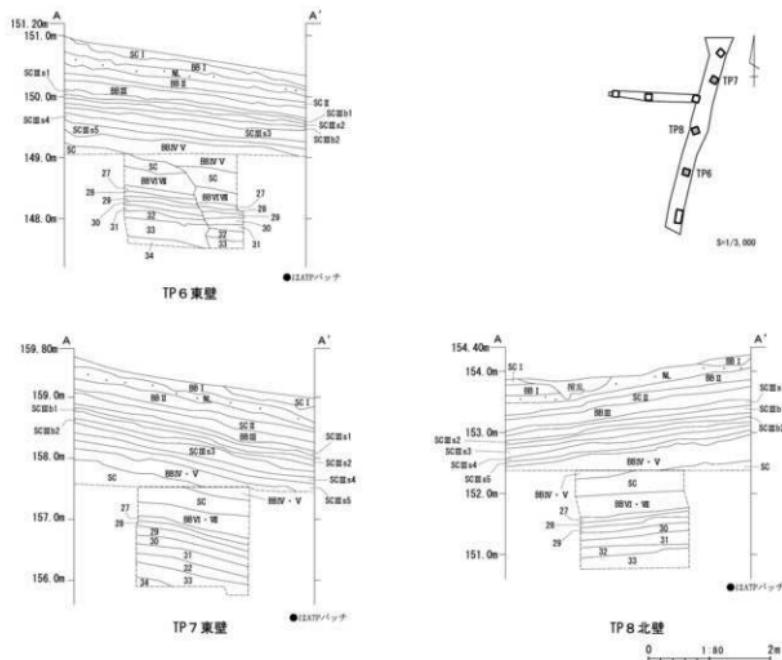
第26層下の第IVスコリア層(SC IV)は、今回の調査区内では認識できなかった。27層以下は中部ローム層である。

第27層：中部ローム1。灰褐色を呈す(7.5YR 5/2)。やや砂質で、締まり、粘性ともにあり。

第28層：中部ローム2。にぶい褐色を呈す(7.5YR 5/4)。細かい赤色スコリアを含む。締まり弱い。



第8図 テストピット土層図



第9図 テストピット土層図

粘性あり。

第29層：中部ローム3。暗灰黄色を呈す（2.5 Y 5/2）。赤褐色スコリアを少量含む。縮まり、粘性ともにあり。

第30層：中部ローム4。にぶい黄色を呈す（10YR 5/3）。赤褐色スコリアを少量含む。縮まり、粘性ともにあり。

第31層：中部ローム5。暗灰黄色を呈す（2.5 Y 5/2）。赤褐色スコリアを少量含む。縮まり、粘性ともにあり。

第32層：中部ローム6。層全体は暗灰黄色（2.5 Y 5/2）を呈すが、硬いスコリア塊（にぶい赤褐色 5 YR 4/3）を含む。硬く縮まる。粘性弱い。ペアスコリアの上部に比定した。

第33層：中部ローム7。暗灰黄色（2.5 Y 5/2）を呈す。やや砂質。縮まり、粘性ともにあり。

第34層：中部ローム8。暗灰黄色（2.5 Y 5/2）を呈す。赤褐色スコリアを多量に含む。縮まり、粘性あり。ペアスコリアの下部に比定した。

註

1. 報告書（県埋文センター 2013）から、第1面の残存状況は、1区では悪いと想定された。特に報告書の第195図から、1区の南半部では第1面は残存していない可能性が大であった。第2面（縄文面）及び休場層も、1区の南半部では残存していない可能性があった（第66図及び103図）。2区は全ての調査面が残存していると予想された。



写真1 表土除去作業状況



写真2 テフラ等現地指導状況



写真3 テストピット下段の掘削作業状況



写真4 石器のデジタルトレース作業状況

第3章 調査の成果

第1節 遺構

今回の調査で検出された遺構は、第1面（中世以降）で円形土坑3基、第2面（縄文時代）で、土坑2基、集石1基、第3面（旧石器時代）で疊群3基である。いずれも2区での検出である。1区は遺構面の残りが悪く、そのためか遺構の検出はなかった。

遺構は、第1面においては表土直下で新規スコリア層（NSC）残存部の上面で検出されている。第2面では土坑は休場層上部層（YLU）の上面が検出面である（集石は別）。第1面のコンター面は富士黒土層（FB）上面であり、ここでも遺構検出を試みたが、遺構は検出できなかつた。また、旧石器時代下部層調査のテストピットでは、旧石器時代の陥穴が検出される第IIIスコリア層上面で、全てのテストピットで遺構検出作業を行つたが、遺構は検出されなかつた。

各遺構のデータについては、遺構一覧表（第2・4表）を参照していただきたい。また、過去に調査された疊群の疊との接合作業は、本報告作成過程では時間的な制約及び個々の疊群内での接合関係が極めて少なかつたこともあり、実施していない。

各面ごとの遺構全体図を第10・12・14図に掲示した。それぞれ10cm間隔の等高線を入れてある（註1）。

1 第1面の遺構

（1）1号土坑（SK 1）（第10・11図）（図版3-1）

2区J-5グリッドより検出された。いわゆる円形土坑であるが、残りが悪く、壁の残存部分は1/5以下であると想定される。

（2）2号土坑（SK 2）（第10・11図）（図版3-2）

2区J-4グリッドより検出された。いわゆる円形土坑であるが、残りが悪く、壁の残存部分は1/5～1/4程度であると想定される。

（3）3号土坑（SK 3）（第10・11図）（図版3-3・4）

SK 2と同様に2区J-4グリッドより検出された。SK 2の東南東約3mの位置にある（遺構中心間）。3基の円形土坑のうち壁が全周するものはこれだけである。長軸約100cm、短軸約98cm。

3基の土坑とも、過去に愛鷹山麓で検出されている円形土坑と同様の遺構である。覆土はすべて1層のみである。遺物の出土は無く、掘り込み面も不明なため、年代の特定はできないが、覆土の状況から同一時期のものと考えられる。

2 第2面の遺構

（1）4号土坑（SK 4）（第12・13図）（図版3-5）

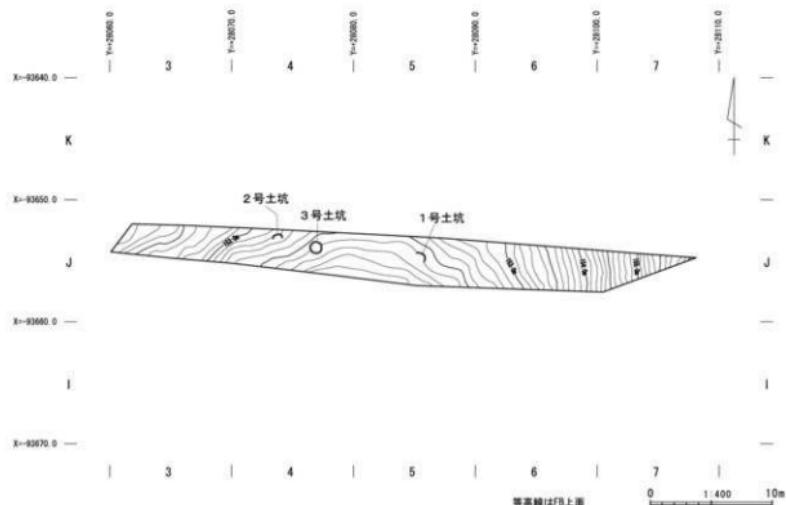
2区との境界に近いJ-8グリッドより検出された。西側のコーナー部分が攪乱のため失われている。そのためやや不明確ではあるが、不整な隅丸長方形を呈すると思われる。壁の立ち上がりは緩やかであり、底部は平坦である。覆土は2層に分けられるが、FB層に類似した土が上部に入り込んでいる。検出面から遺構底部までの深さは最も深い所で約15cmであり、当初の掘り込みはFB層中からなされていた可能性が高い。覆土から遺物は出土していない。

（2）5号土坑（SK 5）（第12・13図）（図版3-6）

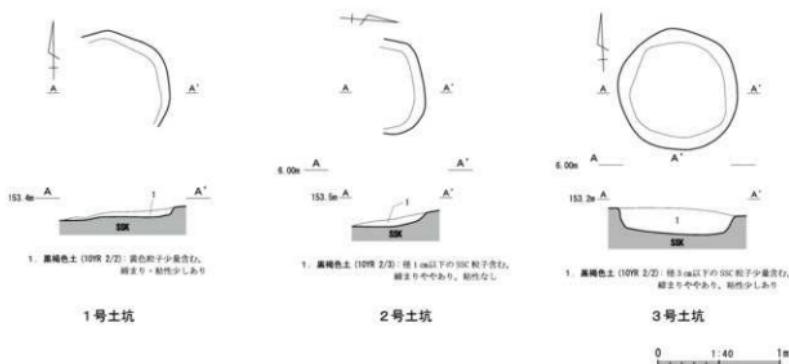
2区J-3グリッドより検出された。壁は緩やかに傾斜し、底部には平坦面がある。覆土は4層に分けられ、上部に灰黄褐色土があるが、全体としてFB層に類似する土である。最も覆土が残存している部分で、底面まで約37cmの深さがある。この土坑はその形状等が、陥穴状の土坑の下部～底部に類似している。休場層以上の層中の掘り込みは確認できなかったが、FB層以上の層から掘り込まれた、陥穴状土坑の可能性が高い。遺物の出土はない。

(3) 1号集石(SY 1) (第12・13図) (図版3-7・8)

2区J-5グリッドより検出された。2区を南北に貫く埋没谷の中央部に位置する。FB層上面での



第10図 第1面遺構全体図



第11図 第1面遺構個別図

検出であるが、掘り込み等は確認できなかった。また、集石下部の漸移層（ZN）から炭化物が検出されたが、レベル差があるため、集石との関連は不明である。

本集石はわずか3点の構成礫からなる長軸が約19cmの極めて小規模な集石である。3点の礫はそれぞれ隣の礫と接しており、まとまった感じを強く受ける。

3 第3面の遺構

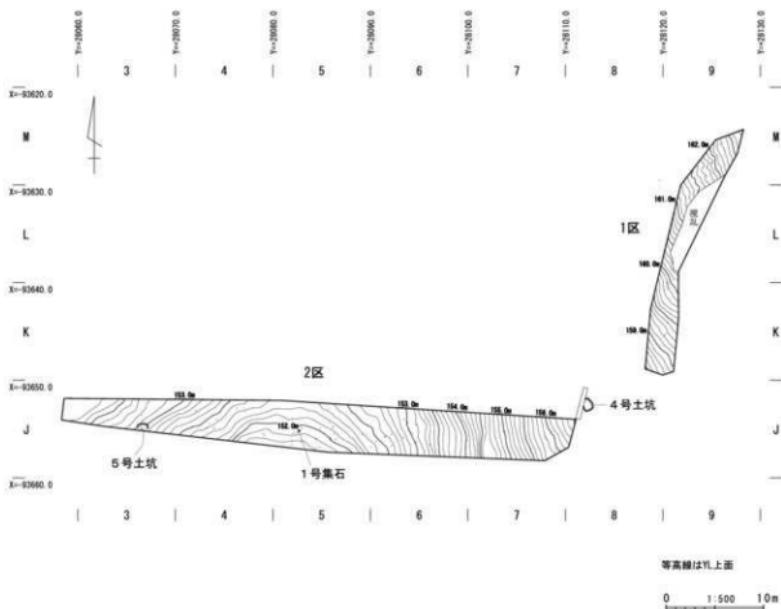
(1) 1号礫群 (RG 1) (第14・15図) (図版4-1・2)

2区J-4・5グリッドより検出された。ただし、構成礫の大多数はJ-4グリッド側に分布する。礫の分布範囲は3基中最も広く、長軸約2m38cm、短軸約1m78cmである。25点の礫と1点の石器95(尖頭器) (第20図14)から構成される。全体としては南北方向に細長い分布範囲を示しているが、東側の礫80がやや全体から離れている。垂直分布を見ると南側ほどレベルが徐々に下がってゆくが、土層の傾斜とほぼ一致しており、傾斜した谷部の地形に沿った垂直分布といえるであろう。接合関係は2組確認できた。礫は散在して分布しており、分散型 (保坂2012) である。

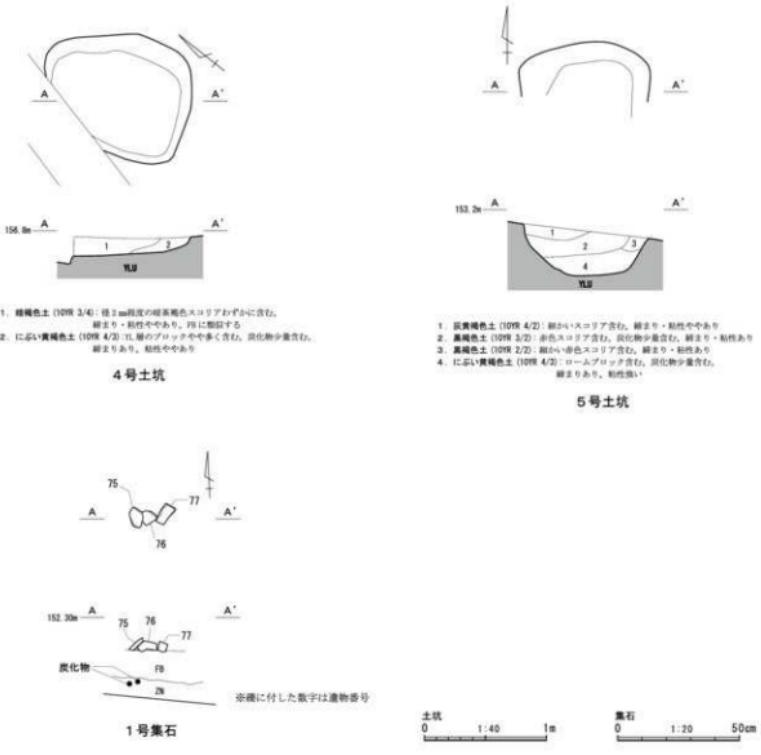
この礫群は休床層中層(YLM)のものと考えられる。なお、尖頭器については、次節で記述する。

(2) 2号礫群 (RG 2) (第14・16図) (図版4-3)

2区J-5グリッドより検出された。5点の礫から構成される、極めて小規模な礫群である。礫の分布範囲は、長軸約26cm、短軸約16cmと非常に小さい。5点の礫が密集しながら東西方向に並んでいる。垂直分布を見ると明らかに西側に傾斜しているが、礫群より下部の土層堆積状況を見る限り、西に向かっ



第12図 第2面遺構全体図



第13図 第2面遺構個別図

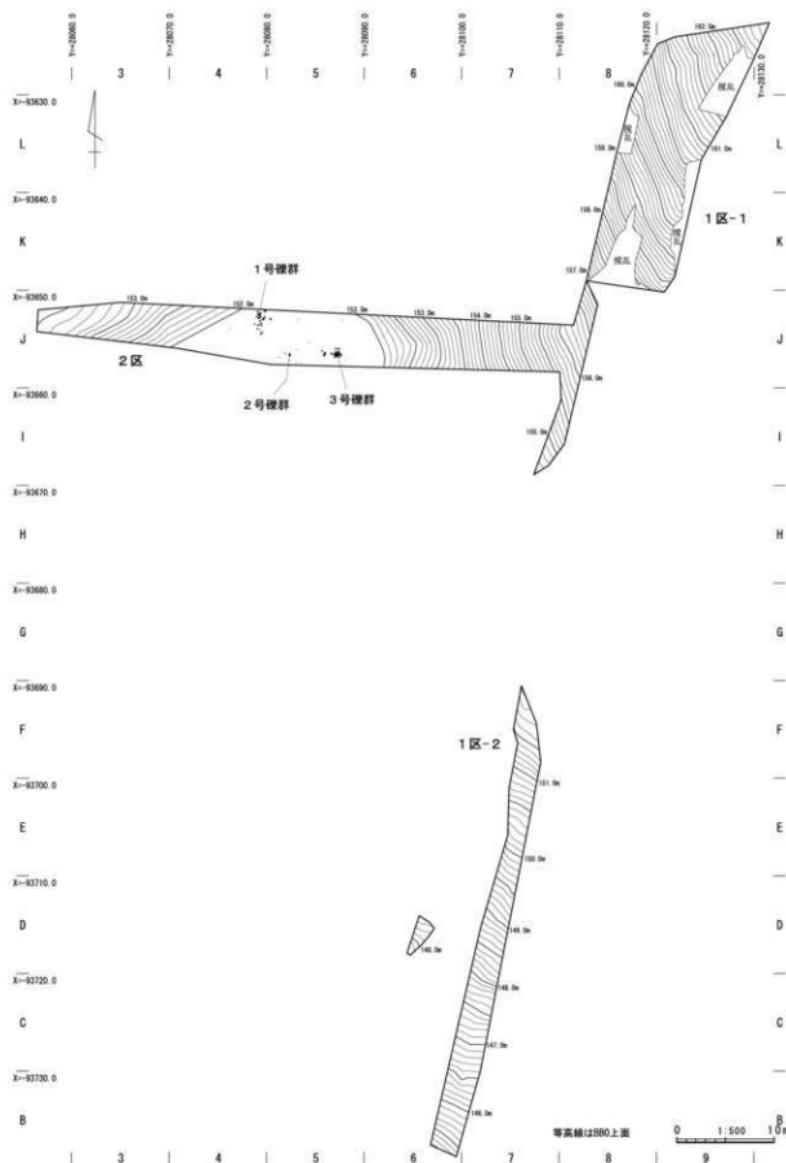
第2表 第2面遺構一覧表

遺構名	区	グリッド	長径(m)	短径(m)	標高数	赤化率(%)	備考
4号土坑	2	J-8	1.27	1.00	—	—	主軸方向: N=42° -W
5号土坑	2	J-3	1.09	0.62	—	—	主軸方向: N=90°
1号集石	2	J-5	—	—	3	0	織散布範囲 0.19 × 0.10 m

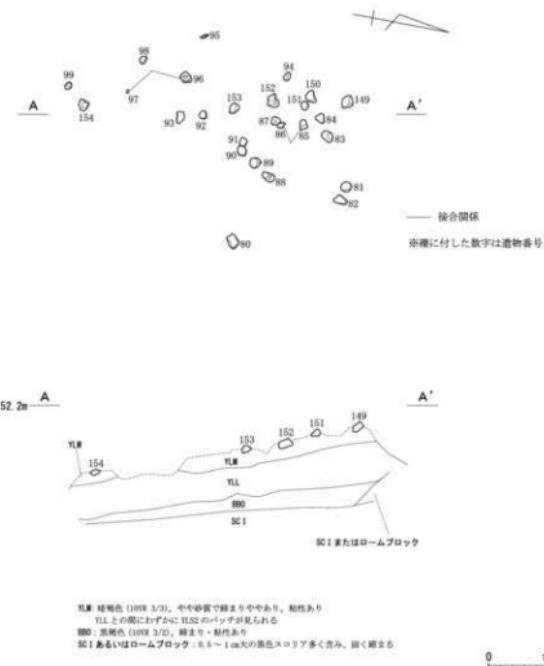
第3表 1号集石標計測表

取り上げ番号	区	遺構	層位 CD	グリッド	重さ(g)	接合番号	備考
75	2	1号集石	FB	J-005	157.0		
76	2	1号集石	FB	J-005	177.3		
77	2	1号集石	FB	J-005	200.9		

第3章 調査の結果



第14図 第3面造構全体図



第15図 1号群実測図

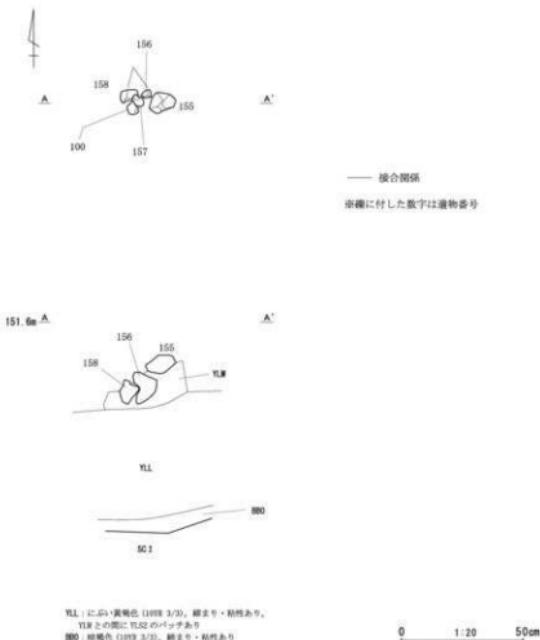
第4表 第3面造構一覧表

造構名	区	グリッド	種個数	赤化率 (%)	備考
1号群	2	J-4・5	26	42	種散布範囲: 2.38 × 1.78 m
2号群	2	J-5	5	20	種散布範囲: 0.26 × 0.16 m
3号群	2	J-5	29	45	種散布範囲: 2.12 × 1.13 m

てわずかに傾斜しているものの、疊群の傾きとは顕著がある。疊群の西方向の傾斜は当時の地表面の凹凸と関連したものであろう。接合関係は1組確認できたが、隣り合った疊である(156・158)。密集型(保坂2012)であるが、大規模な密集型の疊群とは相当な懸隔がある。

休場層中の下部のスコリア層(YLs 2)直上での検出であるため、休場層中層(YLM)のものと考えるのが妥当であろう。

なお、先述した RG 1 は、構成疊の出土レベルが RG 2 と異なっており、YLs 2 との間に「間層」が認められる。RG 2 の場合は最もレベルの低い疊が、YLs 2 にほぼ密着しており、疊群同士に時間差が存在



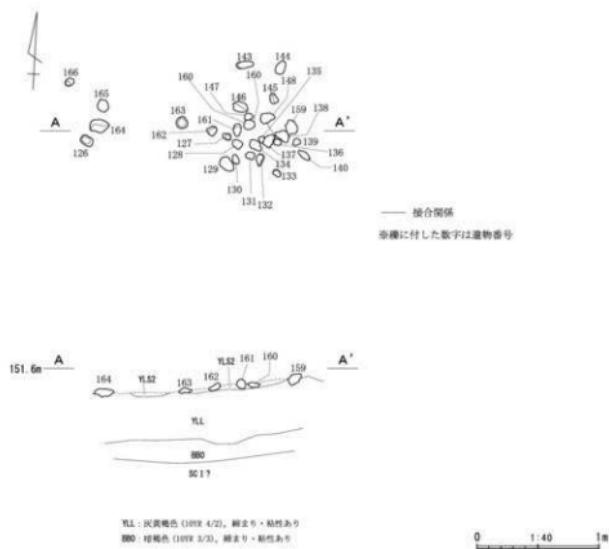
第16図 2号種群実測図

すると思われる。

(3) 3号種群 (R6 3) (第14・17図) (図版5-1)

2区J-5グリッドより検出された。2箇所の礫のまとまりがあり、最も離れた箇所(163と164の間)の間隔が約64cmあるが、この礫群の外には集中して分布する礫が存在しないため、1基の礫群として扱った。西側のまとまり(126、164~166)は4個の礫、東側は25個の礫から構成される。東側は長軸約1m13cm、短軸約1mである。礫の空白部分を含むが、全体としては、長軸約2m12cm、短軸約1mとなる。垂直分布を見ると西側に向かってレベルが極めて緩やかに下がってゆくが、土層の傾斜とほぼ一致しており、傾斜した谷部の地形に沿った垂直分布といえる。接合関係は1組確認できた(136・148)。東側西側ともに礫は集中して分布しており、個々については集中型(保坂2012)であろう。

この礫群の礫はスコリア層中(YLs 2)に含まれ、一部はスコリア層下の休場層下位層(YLL)に食い込んでいることから、YLL最上部~YLs 2の時期と考えるのが妥当であろう。土層断面の観察から見れば、今回調査した3基の礫群のうち、最も古いと考えられる。



第17図 3号群群実測図

第5表 碳群標計測表

遺物番号	区	温機	層位	グリッド	重さ (g)	接合番号	備考	遺物番号	区	温機	層位	グリッド	重さ (g)	接合番号	備考
80	2	1号碳群	YLM	J-005	328.2		被熱	126	2	3号碳群	YLL	J-005	765.9		被熱
81	2	1号碳群	YLM	J-004	451.6		被熱	127	2	3号碳群	YLL	J-005	267.9		被熱
82	2	1号碳群	YLM	J-004	500.1			128	2	3号碳群	YLL	J-005	350.9		
83	2	1号碳群	YLM	J-004	596.0		被熱	129	2	3号碳群	YLL	J-005	721.6		被熱
84	2	1号碳群	YLM	J-004	229.3			130	2	3号碳群	YLL	J-005	284.9		
85	2	1号碳群	YLM	J-004	150.5	①		131	2	3号碳群	YLL	J-005	286.3		
86	2	1号碳群	YLM	J-004	122.2	②		132	2	3号碳群	YLL	J-005	215.2		被熱
87	2	1号碳群	YLM	J-004	248.7			134	2	3号碳群	YLL	J-005	429.6		被熱
88	2	1号碳群	YLM	J-004	455.8		被熱	133	2	3号碳群	YLL	J-005	112.6		被熱
89	2	1号碳群	YLM	J-004	360.7			135	2	3号碳群	YLL	J-005	191.8		被熱
90	2	1号碳群	YLM	J-004	202.6			136	2	3号碳群	YLL	J-005	333.5	③	
91	2	1号碳群	YLM	J-004	232.7			137	2	3号碳群	YLL	J-005	262.9		
92	2	1号碳群	YLM	J-004	113.3			138	2	3号碳群	YLL	J-005	611.9		被熱
93	2	1号碳群	YLM	J-004	249.2		被熱	139	2	3号碳群	YLL	J-005			
94	2	1号碳群	YLM	J-004	218.2			140	2	3号碳群	YLL	J-005	392.4		
95	2	1号碳群	YLM	J-004	285.3	④	被熱	143	2	3号碳群	YLL	J-005	398.0		
97	2	1号碳群	YLM	J-004	9.8	⑤	被熱	144	2	3号碳群	YLL	J-005	333.4		
98	2	1号碳群	YLM	J-004	264.9		被熱	145	2	3号碳群	YLL	J-005	296.5		被熱
99	2	1号碳群	YLM	J-004	125.1			146	2	3号碳群	YLL	J-005	679.7		
149	2	1号碳群	YLM	J-004	621.4			147	2	3号碳群	YLL	J-005	369.1		被熱
150	2	1号碳群	YLM	J-004	266.5		被熱	148	2	3号碳群	YLL	J-005	408.3	⑥	
151	2	1号碳群	YLM	J-004	142.4			159	2	3号碳群	YLL	J-005	1258.9		
152	2	1号碳群	YLM	J-004	779.7		被熱	160	2	3号碳群	YLL	J-005	492.0		被熱
153	2	1号碳群	YLM	J-004	330.0		被熱	161	2	3号碳群	YLL	J-005	510.8		被熱
154	2	1号碳群	YLM	J-004	476.0			162	2	3号碳群	YLL	J-005	360.8		
100	2	2号碳群	YLM	J-005	137.2		被熱	163	2	3号碳群	YLL	J-005	968.6		
155	2	2号碳群	YLM	J-005	712.9			164	2	3号碳群	YLL	J-005	560.1		
157	2	2号碳群	YLM	J-005	88.5			165	2	3号碳群	YLL	J-005	437.2		被熱
156	2	2号碳群	YLM	J-005	506.8	⑦		166	2	3号碳群	YLL	J-005	196.1		被熱
158	2	2号碳群	YLM	J-005	396.8	⑧									

第2節 遺物

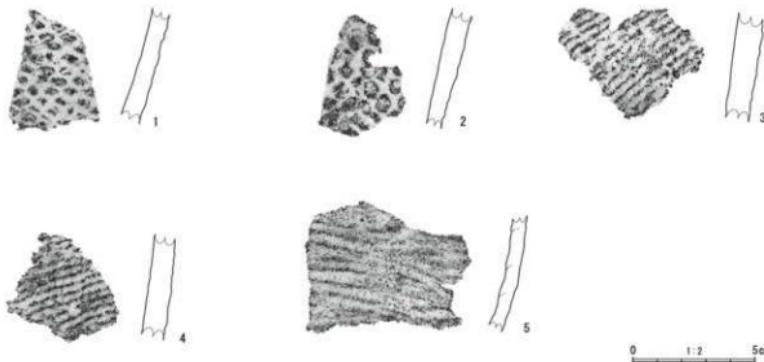
遺物総数は171点である。内訳は、土器が13点、石器類が17点、繩(遺構構成縦合む)が141点である。土器のうち8点は明らかに縄文土器であるが、弥生時代の可能性のある1点(第18図5)及び弥生時代以降の土器と思われる4点(註2)がある。石器類のうち、旧石器時代のものと考えられるものが10点、それ以外の7点は縄文時代と思われる。

なお、遺構に伴った遺物は、旧石器時代の1号縄群(RG 1)を構成していた尖頭器(第20図14)のみである。

1 土器(第18図)(図版8-1)(第6表)

前述したとおり、今回の調査で出土した土器は、弥生土器の可能性のある1点、弥生土器または土師器と思われる4点を除き、縄文土器であった。過去の本遺跡(Na 27-1地点のみ)の調査では、縄文土器以外の土器の出土は無いとされている。今回の調査での土器の出土量は僅少であり、かつ小片が多く、図化できるものは僅かである。

第18図1・2は早期中葉の押型文土器で、両者とも楕円押型文が施文されている。1は明らかに横方向を意識して施文されている。2は楕円文の粒が1に比べて大きく、また走行も不明確で乱れた感じ



第18図 出土土器実測図

第6表 出土土器観察表

番号	遺物 番号	区	時期	グリッド	層位	X座標	Y座標	Z座標	胎土	構成	色調		備考	
											内面	外面		
1	45	2	縄文	J-6	KE	-93656.125	28690.648	152.810	泥	白色粒子・石英粒・1mm以下砂礫合む、鐵錆斑入	白	10186/3に沿い黄褐色	10186/4に沿い褐色	
2	13	1	縄文	K-9	TB	-93645.440	28620.123	159.300	泥	石英粒多く含む、鐵錆斑少々含む、鐵錆斑入	白	10186/1に沿い黄褐色	10186/4に沿い褐色	
3	2	2	縄文	J-5	AS	-93656.050	28681.998	152.385	泥	鐵錆斑・1mm白色粒子・3mm以下砂礫合む	白	10186/2灰黃褐色	10186/6褐色	縄文形体：Lの横方向
4	34	2	縄文	J-5	AN	-93656.237	28681.954	152.334	泥	石英粒・白石英粒子多く含む、2mm以下砂礫合む、鐵錆斑多く含む	白	10186/3に沿い黄褐色	10186/4に沿い褐色	縄文形体：Lの横方向
5	65	2	縄文	J-6	SSC	-93656.033	28691.588	153.184	泥	2mm以下砂礫多く含む、1mm長石含む	白	10187/1に沿い黄褐色	10187/6明黄褐色	

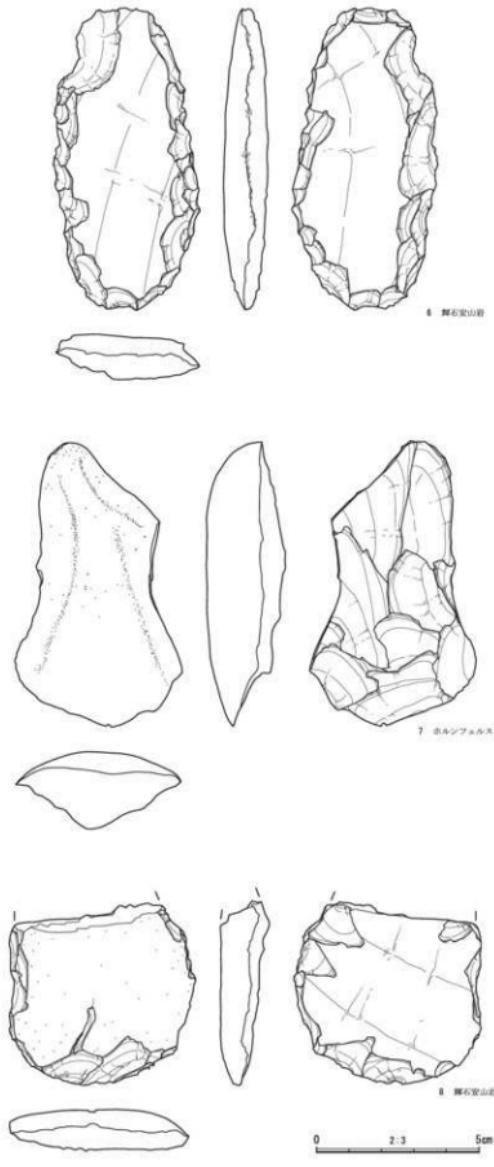
を受ける。1は白色粒子が目立つ胎土である。2は僅かだが纖維を含んでいる。破片が小さいため、確定的には言えないが、ともに密接施文の押型文であろう。

3・4は接合しないが明らかに同一個体である。無節縄文を施文する。小石等を多く含む粗い胎土である。縄文前期以降であろう。5は横方向を中心とした条痕文のみが施文されている。条痕文は、条溝は浅く広く、条間は非常に狭い(註3)。濃いクリーム色を呈する胎土である。黒色粒子を多く含む。裏面は輪積みの痕跡を残しているがよくナデられている。器壁は薄い。新期スコリア層(NSC)から出土した。この破片は胴部であり情報量が少なく、明確な時期比定は困難である。縄文時代晩期後半～弥生時代中期前半の枠内で捉えるしかない。

2 石器 (第19・20図) (図版8-2~4) (第7表) (1) 縄文時代の石器 (第19図) (図版8-2)

縄文時代の石器としては打製石斧3点のみ図示した。6は短冊形ではば完形である。表面左上の抉りは破損の可能性がある。薄めの剥片を使用し、表裏ともに、周辺部にやや細かい二次加工の剥離を全縁部に行っている。表面の中央部は、実測図では剥片作成時の大なり剥離面としているが、自然面の可能性もある。輝石安山岩製であろう。2区の暗褐色土層(AN)から出土した。

7は1区の擾乱土中から出土した。上部は片側が欠損している。



第19図 出土石器実測図 (縄文時代)

表面は無加工であり、裏面には粗い剥離面が全面に見られる。ホルンフェルス製で、やや風化が進んでおり、不明瞭な部分はあるが、細かい調整剥離は行っていないと思われる。

8は打製石斧の残欠である。上側の割れ口は比較的新しい感じを受ける。表面は大半を自然面として残している。2区の栗色土層（KU）から出土した。輝石安山岩製であろう。

以上の3点のうち7を除く2点がANないしKUの出土であることから、これらの打製石斧が中期以降の所産であると考えたい（註4）。

以上の他に、円錐の周囲が薄く剥がれ、自然面が完全に残存している剥片が3点出土している。しかし、二次加工がみられないため、ここでは扱わなかった。

（2）旧石器時代の石器（第20図）（図版8-3・4）

旧石器時代の石器では7点を図示した。このほかに実測図を掲示しなかったが、写真図版のみで掲示したものが3点ある（後述）。この中には縄文層（ZN層より上部）から出土したが、明らかに旧石器時代の石器であるものが含まれている。

9～13は黒耀石製の石器である。9は二側縁加工の黒耀石製ナイフ形石器。やや大型で縦長剥片を素材にして、打点部側を基部にし、打面を残している。左側縁部及び右側縁部下半に二次加工を施し、基部がやや丸みを帯びるように仕上げている。刃部には使用痕がわずかに認められる。薄い剥片が使用されており、透明度の高い石材である。諏訪星ヶ台群。富士黒土層（FB層）最下部出土。

10は1区北側のL-9グリッドから出土した。黒耀石製の抉入削器と思われる。ただし、右側側面の抉り状の剥離は新しい可能性がある。神津島恩馳島群である。FB層下部より出土している。

11も黒耀石製の抉入削器である。1区のFB層より出土した。打点を上にした縦長剥片を使用し、打点を残している。右側面に二次加工で抉り部をつくり、左側面部には自然面を残している。下端部には折断面が見られる。諏訪星ヶ台群だがやや夾雜物が見られる。

12は黒耀石製の楔形石器。2区の休場層上層（YLU）から出土した。諏訪星ヶ台群。

13は幅広だが細石刃とみなせるだろう。諏訪星ヶ台群。2区の風倒木痕中のFB層相当の土中から出土した。今回の調査では無かったが、過去の本遺跡の調査（No.27-1地点）において、細石刃を中心とした石器ブロックと細石刃核が検出されている。

14・15は非黒耀石製の石器である。14は1号躰群中より出土した、ガラス質黒色安山岩製の尖頭器。先端部に僅かな欠損があるが、ほぼ完形である。基部はやや丸みを帯びており、先端部との区別は比較的明瞭である。両面加工であり、二次加工は、石質の関係もあり、やや不明瞭である。

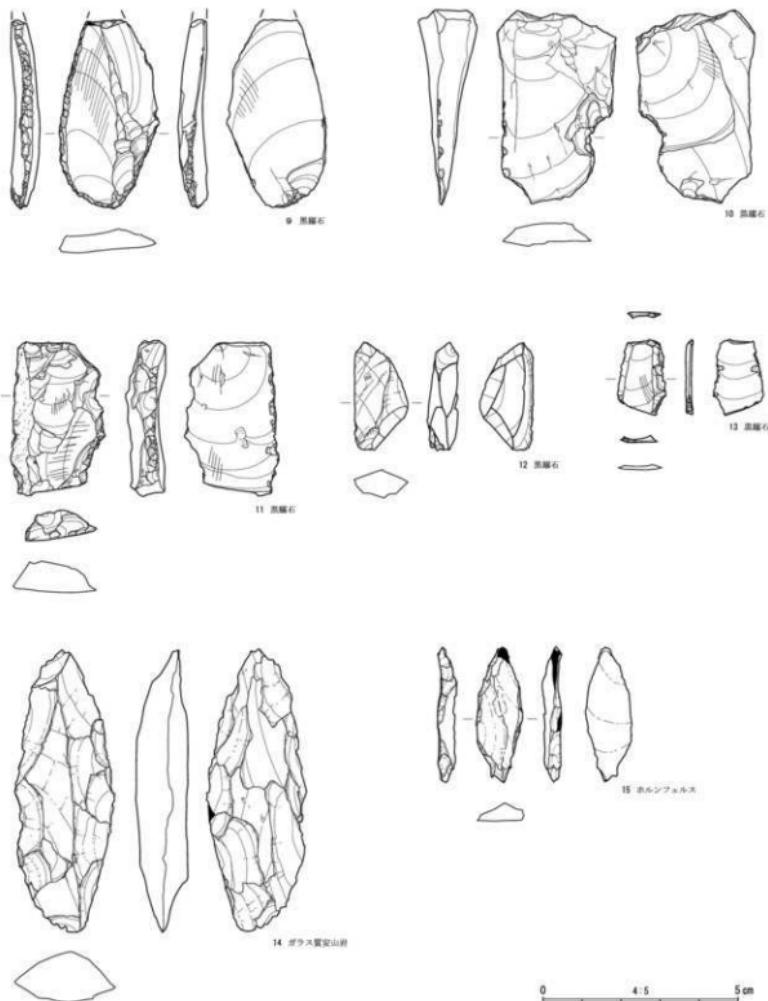
15は二側縁加工と思われる小型のナイフ形石器。先端部は僅かに欠損していると思われる。基部は尖っており、先端とやや区別は付きにくい。打点は先端部側にあったと思われるが、除去されている。左側縁と右側縁基部側に二次加工を行っている。

写真図版8-3の16は実測図を作成しなかったが、テストピット5から出土した黒耀石製の使用痕のある剥片である。第IV黒色帶（BB IV）の上部から出土した。元来は2つに折れて出土した。ただし、本来一体だったものが、掘削時の衝撃で折れた可能性もある。ただし、右側面に刃こぼれ状の使用痕が認められる。天城柏崎群で水和層が良く発達しており、全体が白っぽく見える。

写真図版8-4の17・18は実測図は作成していないが、ともに2区の休場層中層完（YLM）から出土した剥片である。17はガラス質黒色安山岩製の縦長剥片で、打面は残っていない。18はホルンフェルス製で風化が著しく細部は不明である。

註

- 等高線入りの遺構全体図は過去の本遺跡の報告書（県埋文センター2013）と統一を図るため、それぞれの地形測面は、第1



第20図 出土石器実測図（旧石器時代）

面は富士黒土層（FB層）上面、第2面は休場層（Y1層）上面、第3面は休場層直下黒色帶（BB O）上面とした。

①第1面のコンター面はFB層上面であるが、第1面の造構の検出面は、表土等底下、新期スコリア層（NSC層）の残存部分の上面である。したがって、コンター面と実際の造構検出面には齟齬が生じているが、過去の報告書と同様の記載を踏襲し、同一レベルにないコンター図と造構図を同一図中に表現している。

第7表 出土石器計測表

件名	遺物 番号	区	時期	器種	グリッド	層位	X座標	Y座標	Z座標	石材	出土地	重量 (g)	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	備考
6	49	2	縄文	打削石斧	J-5	KD	-30354.361	28605.797	152.697	輝石安山岩		66.7	9.30	4.40	1.35	
7	82	1	縄文	打削石斧						ホルシフェルス		96.3	8.70	5.30	2.40	
8	23	2	縄文	打削石斧	J-4	AN	-30354.776	28671.712	152.969	輝石安山岩		64.1	5.60	3.60	1.30	
9	3	3	臼石器	ナイフ形石器	W-N	FB 最下部	-30228.558	28119.646	160.764	黒曜石	漁翁堂ヶ台	6.9	4.80	2.35	0.60	
10	41	1	臼石器	他入斜面	L-9	FB				黒曜石	仲津島芭麻島	14.8	4.95	3.05	1.30	
11	43	1	臼石器	他入斜面		FB				黒曜石	漁翁堂ヶ台	9.8	3.90	2.40	1.00	
12	106	2	臼石器	楕円6個	J-5	TLE	-30337.076	28698.223	151.832	黒曜石	漁翁堂ヶ台	2.7	2.75	1.38	0.75	楕円6個
13	116	2	臼石器	楕円6個	J-3	FB	-30353.570	28606.549	152.993	黒曜石	漁翁堂ヶ台	8.5	1.90	1.25	0.10	
14	95	3	臼石器	椭形大頭器	J-4	TLM	-30353.511	28678.837	151.712	オクス輝石安山岩		22.6	7.26	2.40	1.30	1号縄文
15	103	2	臼石器	ナイフ形6個	J-5	TLM	-30353.941	28697.686	151.879	ホルシフェルス		1.9	3.45	1.20	0.45	

②第2章第1節で述べたように、第3面の2区谷部のみ土層の比定を誤った状況で地形測量（航空測量）を行ってしまった。したがって、これに基づいて作成した地形測量図は、2区谷部に限っては誤りである。よって今回の報告ではこの部分（標高152m以下のコンター）を空白として遺構全体図を掲示する（第14図）。

2. 第18図5の他に、弥生土器ないし土師器と思われる小片が4点出土している。いずれも器壁は薄く、小石を多く含む胎土で、脆弱である。口縁部が僅かに含まれている。この4点はいずれもNSC層から比較的まとまった位置で出土しており、同一個体と考えられ、弥生土器ないし土師器と考えている。

3. 「条譜」、「条問」の用語は松田光太郎氏の記述に従った（松田 2008）。

4. 本遺跡の過去の調査では、早・前期の土器の大半はFB層から出土していることを踏まえ、層位的に判断した。

第4章 まとめ

(1) 旧石器時代

今回の調査で検出された遺構は、2区の近接した箇所から発見された礫群3基である。その他では遺物（礫含む）の散在的な出土はあったものの、ブロックとしてのまとまりは認識することができなかつた。1区は旧石器時代上部層の残存状況が悪く、特に、遺物が多く出土すると予測された調査区の北側部分の休場層が全て失われていた。南側も残存状況は悪く、結果的にわずかに調査した1区南側の休場層からの遺構・遺物は皆無であった。

2区の中央やや東よりに、南北方向に走る埋没谷があり、3基の礫群は全てこの埋没谷の谷底部ないし谷底に至る斜面部で検出されている。第3章で詳述したように、この3基は全て暗赤褐色のスコリア層と関連しており、時期を判断する上で重要な情報を提供している。このスコリア層は、休場層を三分する際に鍵層となる休場層第2スコリア層（YLs 2）であり、このスコリア層より上層にあるという点で、第1・2号礫群の時期が休場層中層（YLM）であることが確定できた。ただし、2号礫群は、最下部がYLs 2に接している構成礫もあり、YLs 2との間に若干の「間層」をはさむ1号礫群に比べて古いと考えられる。3号礫群は、礫とYLs 2が同レベルであり、休場層下層（YLL）最上部からYLs 2にかけての所産と捉えるのが妥当である。したがって、1～3号礫群は、層位的には新旧関係が看取されるのであり、3号礫群→2号礫群→1号礫群の順で構築されたと考えられる。

過去の本遺跡の調査（No.27－1地点のみ）では、休場層を主とする第III文化層から、9基の礫群が検出されており、そのうち、6基（RG22～24・26・28・29）からは、礫群の下にスコリア層が確認されている。報告者はこのスコリア層をYL-Scと捉え、その上層に構築された礫群を休場層中層段階のものとしている（県埋文センター 2013）（註1）。この6基は、いずれも、今回の調査で3基の礫群が発見されたのと同一の埋没谷の、谷底部～斜面部に存在し、かつ、今回の調査区を挟む位置で南北から検出されている。したがって、今回の調査で検出された3基は、過去の調査の6基と一緒にものと捉えるのが妥当である。合計して9基からなるこれらの礫群は、旧石器時代における谷部の土地利用を考える上で重要な素材を提供していると考えられるが、詳細は後考に待ちたい。なお、過去の調査で検出された6基は土層断面図を見る限り、全ての礫群で、スコリア層の上に「間層」を挟み礫が出土している。この状況は、今回の調査での1号礫群と同一のあり方であり、2・3号礫群と異なっている。これらの問題を踏まえて、礫群間の時間的関係を把握する必要がある。

今回の調査で、極めて少量の旧石器時代の石器が出土している。基本的には休場層の下～上層まであり、縄文時代層のFB層からも出土している。第20図13の細石刃を除き、いずれも根根・愛鷹編年の4期の石器群である（細石刃は5期）（高尾 2006）（池谷他 2010）。

テストピット調査で、TP 5から出土した黒耀石の剥片は、わずか1点とはいへ重要である。過去の本遺跡の調査において、第IV黒色帯を中心とした文化層を第I文化層としている。過去の調査では、黒耀石製石器2点（近接して出土し、接合しているので実質的には1点）と礫3点が出土した。石器の出土位置は、今回の出土地点から約310mほど離れていて、出土位置の標高も大きく異なり、地形的にも複数の尾根と谷を挟んでいる。したがって、同一遺跡内とはいへ、出土層位という点からは一括りにはできない。また、今回の石器の出土位置は過去の調査の3点の礫の位置からも大きく隔たっている。したがって、今回の1点は本遺跡の第IV黒色帯の時代における人間の活動の痕跡を、位置的に大きく広げたことになるであろう。

(2) 繩文時代

今回の調査で検出された縄文時代の遺構は、土坑2基、集石1基のみである。遺物は暗褐色土層(AN)から富士黒土層(FB)まで含まれる。新規スコリア層(NSC)からは確実な縄文時代の遺構は検出していない。集石は極めて小規模であり、FB層中に礫が密着した状態で検出された。土坑は、いずれも休場層上面で検出したが、2基とも立ち上がりはFB層中ないしはそれより上の層から掘り込まれた可能性が高い。土坑のうち一基(SK5)は、陥穴の底部～胴部下半に形態が類似している。過去の調査では周辺に、まばらに陥穴状の土坑が分布している(SP148～150)ので、それと一連のものだと判断したい。

渕ヶ沢遺跡の過去の調査においては、縄文時代の遺構、遺物が特に集中している箇所は、比較的限定されている。最も集中しているのは、今回の調査の1区北側のすぐ東側の尾根部である。下段地区の5・6区にも集中地点が存在するが、今回の調査区と標高がかなり異なり、距離も離れている。今回の調査区の2区及び1区の北側部分は、前者の集中部の外縁部ということになる。過去の調査の5区では南北方向の埋没谷で、陥穴状のものを主とする土坑群とともに遺物が集中している状況が看取できる。今回の2区の調査でもほぼ同様のことが言えるだろう。

2区の新規スコリア層中から出土した条痕文土器は、胴部破片で条痕文が施されているのみで、詳細は不明であるが、縄文時代晚期後半～弥生時代中期前半の範囲に収まると思われる。本遺跡の過去の調査では明確に同時期の遺物は発見されていない(註2)。今回発見された、この時期の土器は本遺跡では初出である。縄文晚期後半～弥生前期後半の遺跡としては本遺跡周辺では、葱川遺跡(第1章第2図11)が有名であるが、雌鹿塚遺跡(37)からも該期の遺物が発見されている。

(3) 弥生時代以降

遺構としては2区から発見された3基の円形土坑のみである。第3章でも述べたが、過去の本遺跡の調査で検出された遺構(溝状遺構等も含む)は谷部に比較的集中する傾向がうかがえるが、今回の調査でもその傾向に違うものではなかった。円形土坑については、他遺跡も含めた、遺跡内でのミクロな位置関係等検討すべき点は多いが、今回の報告ではそこまで踏み込めなかった。今後の検討課題としたい。

遺物としては、前述の条痕文土器が弥生土器の可能性を有するほか、第3章の註2でのべたように、明らかに縄文土器と異なる土器が新規スコリア層から出土している。弥生土器ないし土師器に比定したが、前述したとおり、過去の調査では、弥生時代以降の遺物は出土していない。そのため、細片であっても重視されるべきであろう。

註

1. 他の3基(RG6・12・30)には土層断面が記載されておらず、詳細不明である。YL～Scが存在したかどうかではない。ただし、この3基は、本文中で述べた既報告の6基、及び今回報告する3基からは距離が離れており、除外して考えても問題はないであろう。
2. 渕ヶ沢遺跡(県埋文センター2013)報告書第1分冊225頁の679～682は、横帯弧線文や巴文、巴弧線文が存在せず、晚期の土器とみなすことはできない。後期後半段階として提えるのが妥当である(静岡市教委1990)(設楽2008)。

引用・参考文献

- 池谷信之 2009 「旧石器時代における陥穴獣と石材獲得・石器製作行動
－愛鷹・箱根山麓 BB III層期を中心として－」『駿台史学』第135号
- 池谷信之・富樫孝志・麻柄一志 2010 「第二章 旧石器文化の編年と地域性 五 中部地方」
『講座日本の考古学1 旧石器時代上』 青木書店
- 小野真一・笹津備洋 1971 「駿東郡原町慈川遺跡調査報告」『駿豆の遺跡研究』(1)
- 小林達雄編 2008 『絶賀縄文土器』 アム・プロモーション
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 『元野遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査報告書調査報告第189集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009a 『秋葉林遺跡I』 静岡県埋蔵文化財調査報告書調査報告第207集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009b 『イタドリA遺跡 イタドリB遺跡 イタドリC遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査報告書調査報告第211集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010a 『秋葉林遺跡II』 静岡県埋蔵文化財調査報告書調査報告第216集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010b 『沼津市井出・石川神ヶ沢の遺跡群』
静岡県埋蔵文化財調査報告書調査報告第223集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010c 『的場古墳群・的場遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査報告書調査報告第227集
- 静岡県教育委員会 1981 『静岡県の中世城館跡』
- 静岡県教育委員会 1988 『静岡県文化財地図I 一静岡市以東ー』
- 静岡県教育委員会 1988 『静岡県文化財地名表I』
- 静岡県埋蔵文化財センター 2012a 『秋葉林遺跡III』 静岡県埋蔵文化財センター調査報告第9集
- 静岡県埋蔵文化財センター 2012b 『鎌沢遺跡・銭神遺跡』 静岡県埋蔵文化財センター調査報告第10集
- 静岡県埋蔵文化財センター 2013 『湧ヶ沢遺跡』 静岡県埋蔵文化財センター調査報告第30集
- 静岡市教育委員会 1990 『蛭田遺跡』 本編 静岡市埋蔵文化財調査報告 23
- 設楽博己 2008 『清水天王出土器』『絶賀縄文土器』 アム・プロモーション
- 杉原莊介・小野真一 1965 「静岡県休場遺跡における細石器文化」『考古学集刊』第3巻2号
- 高尾好之 2006 「東海地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年の研究』 同成社
- 中野国雄 1983 「中世城郭の歴史的背景について（2）」『沼津市歴史民俗資料館紀要』 7
- 沼津市 2002 『沼津市史 資料編 考古』
- 沼津市教育委員会 1980 『西大曲遺跡発掘調査概報』 沼津市文化財調査報告書第20集
- 沼津市教育委員会 1985 『平沼吹上遺跡発掘調査報告書』 沼津市文化財調査報告書第36集
- 沼津市教育委員会 1987 『沼津市埋蔵文化財分布地図』
- 沼津市教育委員会 1990 『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書I・II 遺構編・遺物編』 沼津市文化財調査報告書第51集
- 沼津市教育委員会 2000 『鳥谷アラク遺跡発掘調査報告書』 沼津市文化財調査報告書第75集
- 沼津市教育委員会 2011 『井出丸山遺跡発掘調査報告書』 沼津市文化財調査報告書第100集
- 沼津市歴史民俗資料館 1983 『資料集（1） 柳沢・伊良宇編』 沼津市歴史民俗資料館資料集4
- 羽生二生保 2013 「金雲母と植物織維痕」『日本先史考古学論集』 六一書房
- 保坂 康夫 2012 『日本旧石器時代の縄線をめぐる総合的研究』
- 町田 洋他 2006 『日本の地形5 中部』 東京大学出版会
- 松田好太郎 2008 『貝殻文』『絶賀縄文土器』 アム・プロモーション

付録 渕ヶ沢遺跡出土黒曜石製石器の产地推定

竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）

1はじめに

沼津市根古屋に所在する渕ヶ沢遺跡から出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、产地を推定した。

表1 分析対象一覧表

分析 番号	遺物 番号	出土場所	基準
1	3	FB 低下部	ナイフ形石器
2	41	FB 下部	他人物語
3	42	FB	他人物語
4	100	ULC	他人物語
5	116	FB	細刃刀
6	173	HB-N	鉈片

2 試料と方法

分析対象は、黒曜石製石器6点である（表1）。時期は、いずれも旧石器時代とみられている。試料は、測定前にメラミンフォーム製スponジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計 SEA1200VX を使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム (Rh)、X線検出器は SDD 検出器である。測定条件は、測定時間 100sec、照射径 8 mm、電圧 50kV、電流 1000 μA、試料室内雰囲気は真空中に設定し、一次フィルタに Pb 測定用を用いた。

黒曜石の产地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石产地推定法である判別図法を用いた（望月 1999など）。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の合計7元素のX線強度 (cps; count per second) について、以下に示す指標値を計算する。

$$1) \text{ Rb 分率} = \text{Rb 強度} \times 100 / (\text{Rb 強度} + \text{Sr 強度} + \text{Y 強度} + \text{Zr 強度})$$

$$2) \text{ Sr 分率} = \text{Sr 強度} \times 100 / (\text{Rb 強度} + \text{Sr 強度} + \text{Y 強度} + \text{Zr 強度})$$

$$3) \text{ Mn 強度} \times 100 / \text{Fe 強度}$$

$$4) \log(\text{Fe 強度} / \text{K 強度})$$

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図（横軸 Rb 分率 - 縦軸 Mn 強度 × 100/Fe 強度の判別図と横軸 Sr 分率 - 縦軸 log(Fe 強度 / K 強度) の判別図）を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、产地を推定する。この方法は、



図1 黒曜石产地分布図（東日本）

できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、 $\log(\text{Fe強度} / \text{K強度})$ の値が減少する（望月 1999）。また、原石データのない未知の産地については検討できない。試料の測定面にはなるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表2に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図1に各原石の採取地の分布図を示す。

3 分析結果

表3に石器の測定値および算出した指標値を、図2と図3に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするために、図では各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、4点が星ヶ台群（長野県諏訪エリア）、1点が柏崎群（静岡県天城エリア）、1点が恩馳島群（東京都神津島エリア）の範囲にプロットされた。表3に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

4 おわりに

測ヶ沢遺跡より出土した黒曜石製石器6点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、4点が諏訪エリア、1点が天城エリア、1点が神津島エリアと推定された。

引用文献

望月明彦 1999 上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定、大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2—上和田城山遺跡篇—」：172–179、大和市教育委員会。

表2 東日本黒曜石産地の判別群一覧表

新規地図	エリア	判別群名	原石採集地								
			白樺1	春木山頂 (43)	八号井跡地 (33)	参考地図					
	白樺	白樺2		子の内山遺跡 (23)	白樺洞 (45)	十勝川河谷 (4)	北御所 (4)	八号井 (4)	黒曜石 (30)	アゾミイの里 (11)	根室鉄道 (1)
	春木川	春木川		春木川 (12)							
	上木樺	上木樺		十勝三峰 (6)	タウシバペツリ石狩 (12)	タウシバペツリ					
				左岸 (10)	ナツノ岩 (3)						
	裏川	裏川		裏川 (3)							
	豊浦	豊浦		豊浦 (3)							
	旭川	旭川		古文台 (9)	御砂台 (2)						
	毛当	毛当		毛当町 (19)							
	秋父別	秋父別1									
		秋父別2		中山 (86)							
		秋父別3									
	遠軽	遠軽		佐久間湖 (20)							
	生田原	生田原		C.掛布川河床 (16)							
	留比置	留比置1									
		留比置2		サシヨマップ (10)							
	利尻	利尻		利尻先島セキリー場 (2)	利尻川右岸 (2)	利尻川左岸 (6)					
	木造	木造島		山米島海岸 (13)	鶴ヶ坂 (10)						
	尻焼	尻焼		尻焼浜 (7)	八幡山公園 (3)						
	青森	青森		大田内 (8)							
	弘前	弘前		金+純金 (10)							
	八戸	八戸		鶴見町 (1)							
	岩手	北上川		北上川 (9)	真城 (33)						
		北上河原		北上河原 (1)							
		宮古	宮古	通ノ賀 (8)							
		色綱	色綱	健原 (4)							
		船合	船合1	土蔵 (30)							
			船合2								
		仙郷	仙郷	仙郷 (30)							
		山形	月山	月山苔原 (2)	大庭沢 (16)						
		鶴羽	鶴羽	たらみ代 (10)							
		新潟	柏原	柏原駅 (10)							
		津津野	津津野	津津野駅 (10)							
		福井	吉田沢	吉田沢 (22)							
		高岡	七尋沢	七尋沢 (3)	御辨沢 (3)						
			西尾屋	モロバーライト上・下柴畠塙壁 (36)							
			砺山	砺山 (14)	御屋敷 (34)						
			小保方	小保方 (42)							
			上屋橋	上屋橋 (10)							
			上屋橋1	新舟井川・キンチャク (20)	上屋橋西北 (30)	土屋脇西 (11)					
			古崎	和田岬 (1)	シンドウ上 (20)	古崎 (30)	御辨沢スキー場 (20)				
			ブリノ沢	ブリノ沢 (20)							
			御ノ沢	御ノ沢 (20)							
			高砂沢	高砂沢 (19)							
		諏訪	星ヶ台	星ヶ台 (25)	星ヶ原 (20)						
		諏訪	渋山	渋山 (20)	美濃峰 (20)	美濃峰東 (20)					
			芦ヶ沢	芦ヶ沢 (20)							
			須原	須原 (31)							
			御前屋	御前屋 (34)							
			御前屋	御前屋 (20)							
		諏訪	上多賀	上多賀 (20)							
			松原	松原 (20)							
		東京	恩馳島	恩馳島 (27)							
			御嶽島	御嶽島 (20)							
		鳥取	久見	久見バーライト (16)	久見銀座 (5)						
			東浦	東浦塙地 (CD)	加茂 (4)	岸畠 (2)					

表3 測定値および産地推定結果表

分析 番 号	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb/Sr		Sr分率	$\log(\text{Fe}/\text{K})$	判別群	エリア	分類
								Rb	Sr					
1	201.8	126.0	1105.9	764.8	286.4	262.3	737.4	25.18	80.38	13.27	0.37	星ヶ台	諏訪	1
2	150.6	78.2	963.1	215.8	216.1	202.9	303.1	19.38	7.96	24.95	0.81	恩馳島	神津島	2
3	322.1	131.8	1126.3	822.8	312.7	488.5	795.3	35.49	16.52	13.34	0.38	星ヶ台	諏訪	3
4	209.8	118.6	1109.8	738.0	283.2	370.9	712.3	35.07	10.69	13.46	0.58	星ヶ台	諏訪	4
5	275.0	111.4	1106.2	718.2	268.9	347.5	708.8	35.16	10.13	13.12	0.60	星ヶ台	諏訪	5
6	178.5	90.7	3046.0	259.0	629.6	371.2	1409.0	8.87	2.99	21.85	1.23	利尻	大場	6

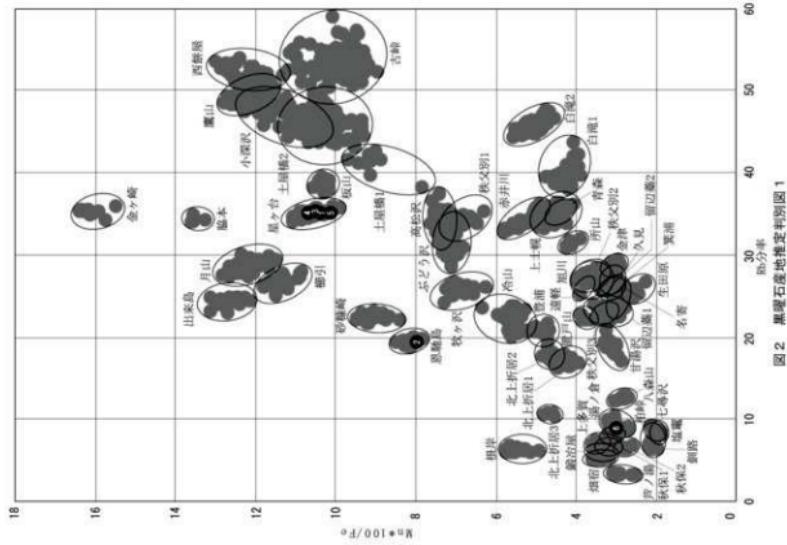


図2 黒曜石産地推定判別図1

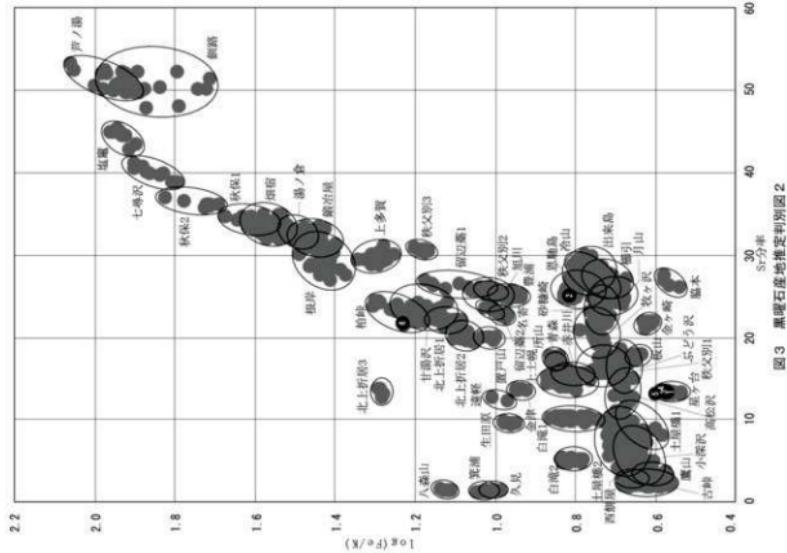


図3 黒曜石産地推定判別図2

図版1



1 第1面完掘状況（南から）



2 第2面完掘状況（南から）

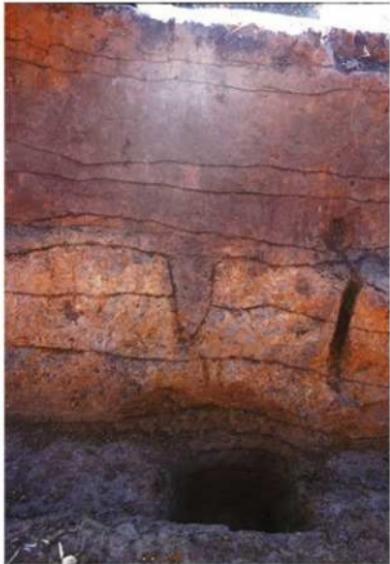
図版2



1 第3面完掘状況（北西から）



2 2区北側土層断面1



3 2区北側土層断面2

図版3



1 1号土坑完掘状況（西から）



2 2号土坑完掘状況（南から）



3 3号土坑半截状況（南から）



4 3号土坑完掘状況（西から）



5 4号土坑完掘状況（北東から）



6 5号土坑完掘状況（南から）



7 1号集石様出状況（南から）



8 1号集石半截状況（南から）

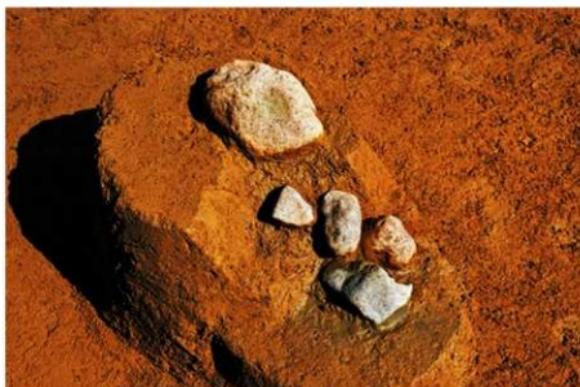
図版4



1 1号埋群（南東から）

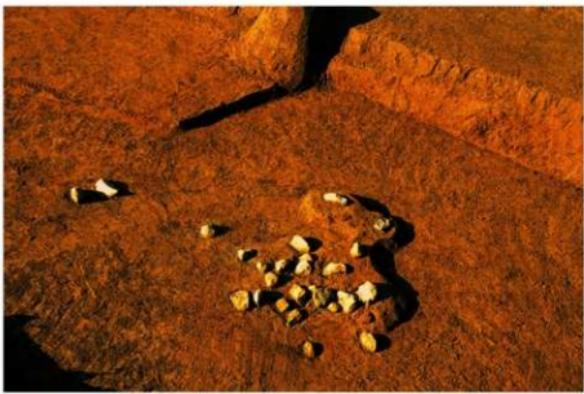


2 1号埋群に伴った尖頭器
(南東から)



3 2号埋群（北西から）

図版5



1 3号石器群（南東から）



2 1~3号石器群とその周辺の遺物出土状況（南東から）



3 第IV黑色帶石器出土状況（TP5）（北から）

図版6



1 新期スコリア層～栗色土層中の遺物出土状況（南から）



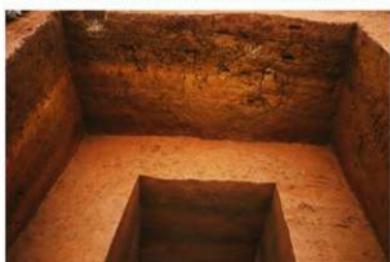
2 1区北側富士黒土層中の遺物出土状況（北から）



3 2区富士黒土層～漸移層中の遺物出土状況（南東から）



4 TP 1北壁土層断面（南から）



5 TP 2北壁土層断面（南から）



6 TP 3東壁土層断面（西から）



7 TP 4北壁土層断面（南西から）



8 TP 5東壁（北側）土層断面（西から）

図版7



1 TP 5東壁（南側）土層断面（西から）



2 TP 6北壁土層断面（南西から）



3 TP 7東壁土層断面（北西から）



4 TP 8北壁土層断面（南東から）



5 TP 8東壁土層断面（南西から）



6 TP 1・2完掘状況（南東から）

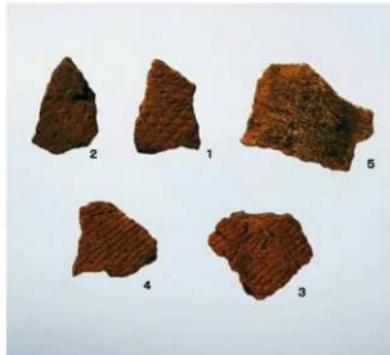


7 TP 3・4・7・8完掘状況（南西から）



8 TP 5・6完掘状況（北東から）

図版8



1 出土土器



2 出土石器（縄文時代）



3 出土石器（旧石器時代）1



(表面)



(裏面)

4 出土石器（旧石器時代）2

報告書抄録

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第55集
澁ヶ沢遺跡II
新東名No.27-1 地点

新東名高速道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
沼津市-12

平成29年2月28日発行
編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター
〒421-3203 静岡県静岡市清水区蒲原5300番5号
TEL 054-385-5500（代）
FAX 054-385-5506
印 刷 所 みどり美術印刷株式会社
〒410-0058 静岡県沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL 055-921-1839（代）
FAX 055-924-3898